

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕 ～デカルトの〈âme〉の諸能力について（その1）～

村 上 吉 男

9. 精神の能力〈sentir〉や〈imaginer〉のまとめ

筆者はデカルトが語り、筆者が名付ける「日常的用法」での精神（âme）の諸能力についてみるにあって、ここでもまずは、前回⁽¹⁾用いた引用文を再度提示するところからはじめて、そこに示唆されよう認識論的思想を確認しておかねばならない。

⑰ Qu'est-ce donc que je suis? Une chose qui pense. Qu'est-ce qu'une chose qui pense? C'est-à-dire une chose qui doute, qui conçoit, qui affirme, qui nie, qui veut, qui ne veut pas, qui imagine aussi, et qui sent.⁽²⁾

わたしとは何であるのか。思惟するものである。思惟するものとは何か。すなわち疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた想像し、感じるものである。

⑱ Je suis une chose qui pense, c'est-à-dire qui doute, qui affirme, qui nie, qui connaît peu de choses, qui en ignore beaucoup, qui aime, qui hait, qui veut, qui ne veut pas, qui imagine aussi, et qui sent.⁽³⁾

わたしとは思惟するものである。すなわち疑い、肯定し、否定し、わずかなことを認識し、多くのことを知らず、愛し、憎み、意志し、意志しない、なおまた想像し、感じるものである。

⑲ Les facultés de vouloir, de sentir, de concevoir, etc., ne peuvent pas proprement

être dites ses (mon esprit) parties: car le même esprit s'emploie tout entier à vouloir, et aussi tout entier à sentir, à concevoir, etc.⁽⁴⁾ (括弧内は筆者)

意志し、感じ、理解するなどの諸能力がわたしの精神の部分であるということは本来不可能である。なんとなれば意志し、感じ、理解するなどもすべて同じ一つの精神であるからである。

以上三つの引用文の出典は《MÉDITATIONS (省察)》であった。⑰は〈De la nature de l'esprit humain; et qu'il est plus aisé à connaître que le corps (人間的精神の本質について。精神は身体よりもさらに分かりやすいこと。〉⁽⁵⁾ という表題下の「第二省察」に、⑱は〈De Dieu; qu'il existe (神について。神は存在すること。〉⁽⁶⁾ という表題下の「第三省察」に、⑲は〈De l'existence des choses matérielles, et de la réelle distinction entre l'âme et le corps de l'homme (物質的事物の存在について、そして人間の精神と身体との実在的な区別について。〉⁽⁷⁾ という表題下の「第六省察」によっていた。

そこで筆者には、デカルトが上記三つの引用文に共通して散見する〈意志し、感じ(る)〉などをば、同じく上記表題の、わけでも⑰や⑲のそれぞれに記される〈esprit〉や〈âme〉の諸能力に見立てていたと断じてよいかが問題となる。別言すると、この引用文⑰⑱⑲にすべて見出されてくる諸能力は、たとえば⑲の表題〈神〉の〈存在〉証明を引き出すための諸能力に、要するにいわゆる〈真理の探求〉における〈esprit〉の諸能力にだけかぎられて語られるのかどうかということである。

ところで『第五答弁Ⅳ』において、デカルトは〈esprit〉と〈âme〉のそれまでの慣習的各用法を逆転せしめねばならぬことを宣言する。当時、〈わたしたちが栄養を取り、成長⁽⁸⁾し、〈思惟する原理〉⁽⁹⁾が〈âme〉と称されたこと、ときにこの〈思惟する原理〉が〈esprit〉と呼ばれたこと、それでもその〈esprit〉は〈âmeの主要な部分〉⁽¹⁰⁾でしかなかったことに対し、彼は次のようにいう。

⑳Mais moi, venant à prendre garde que le principe par lequel nous sommes nourris est entièrement distingué de celui par lequel nous pensons.... ...Je ne considère pas l'esprit comme une partie de l'âme, mais comme cette âme tout entière qui pense.⁽¹¹⁾

(傍線部分は筆者)

わたしはしかし、わたしたちが栄養を取る(ところの)原理は、わたしたちが思惟する原理とはまったく区別されることに気づいた…。(ので)わたしは 〈esprit〉を〈âme〉の部分とではなくて、思惟する〈âme〉全体とみなすのである。(括弧内は筆者)

傍線部分はまさしく、デカルトが〈âme〉の従来の用法を覆した見方をさす。だがだからといって、〈âme〉とその用法が彼の主張から取り除かれることが意味されるのではない。彼は〈思惟する原理〉である〈esprit〉を〈âme〉の〈部分〉から〈全体〉に移し変えさらには独立させて捉えたにすぎない(これがいわゆる〈真理の探求〉の〈精神(esprit)〉となる)のであって、〈âme〉とその用法はかつての理解のままに残る(これが「日常的用法」の〈精神(âme)〉となる)といわねばならぬのである。なんとすれば彼はさらに【第五答弁Ⅶ】で以下のごとくに語るからである。

②J'ai souvent aussi fait voir fort clairement que l'esprit peut agir indépendamment du cerveau; car il est certain qu'il est de nul usage lorsqu'il s'agit de former des actes d'une pure intellection, mais seulement quand il est question de sentir ou d'imaginer quelque chose. ⁽¹²⁾

わたしはまたしばしば明晰に、〈esprit〉が脳と関係なく働きかけ得ることを示しおいた。それというのも、確かなことは、脳は純粋な思惟作用をなすときに働くのではなく、たんに何かを感じ、あるいは何かを想像するときに働くことにあるからである。

引用文②で知り得るは次のことである。〈esprit〉が〈indépendamment du cerveau(脳と関係なく、または脳から独立に)×働きかけ得る〉と記される〈働きかける〉を実際可能にするのは、引用文①⑧⑨での〈疑う、理解する、肯定する〉などの諸能力であり、かかる諸能力は〈esprit〉における諸能力に該当させ得るのである。なんとすれば〈esprit〉としての諸能力は②の〈car(それというの

も) 以降の文脈から、〈sentir (感じる)〉や〈imaginer (想像する)〉を除いた、〈une pure intellection (純粹な思惟作用)〉をなす諸能力であると読み得るからである。するとこの文脈によって、今度は〈感じる〉や〈想像する〉の方が〈脳〉と関係せざるを得なくなろう。しかもこうなると、〈脳〉にかかわる〈感じる〉や〈想像する〉はすでに、〈esprit〉のではなしに、〈âme〉の諸能力でしかないであろう。かつこの諸能力でさえ「働きかける」能力でなければならぬであろう。要は㉔に書き込まれる〈脳〉こそ〈âme〉なのだと知ることである。だから筆者が以前指摘していた通り、デカルトにあって、〈脳〉が〈âme〉であると捉えられるその部位は〈腺 (H)〉と〈脳の中樞部位⁽¹³⁾〉に限定されるにしろ、「〈âme〉とその用法はかつて (〈âme〉が〈栄養を取り、成長し、思惟する原理〉であると) の理解のままに残る」と断言し得るのである (ただしこの理解は彼独自の理解へと展開する。そのことは後段で触れる)。それゆえ㉔をみても、〈感じる〉や〈想像する〉が彼のいう〈脳すなわち âme〉の諸能力であると受け取らずして、この諸能力はいったい〈脳すなわち âme〉(諸能力が〈腺 (H)〉でなく、〈脳の中樞部位〉を出所とすることはのちの本文で知り得るであろう) 以外のいずこに見出されると、また〈âme〉はそもそも上記した〈脳〉の部位のほかのどこに充当させるといい得るのか、もはや見通しすらつかなくなるのである。

〈âme〉が〈脳〉の二つの部位に位置づけられるとは、筆者が強いて訳出しなかった引用文㉔の④とする〈il est question de (が問題である)〉を、ここに改めて取り上げることでより明らかにされるといえる。ここで㉔中の訳に④を加えず記すはそれなりの理由がある。それは、上記④以外での同様な語句 (㉔とする) の〈il s'agit de (が問題である)〉も含めて訳すならば、〈car〉以降の訳文があまりに長く煩雑になるであろうのを避ける必要があったからである。〈脳〉に関した④のみをその該当箇所に入れると、〈脳は... 何かを感じ、あるいは何かを想像することが問題であるときに働く〉となる。その際、何者をして〈(が)問題である〉といわせるとみるかを明確にしないかぎり、ことは「煩雑になる」ということなのである。何者かに充当するのはこれを書き残したデカルトではなく、〈脳〉である。だが④を含んだ上記引用の〈脳〉があたかも〈問題である〉と意志 (判断) していることになると理解し得るのか。否である。その〈脳〉も確かに〈âme〉にちがいなからうが、筆者は他に〈âme〉と捉えられる

〈感じ、… 想像する×脳〉の方が〈問題である〉と意志（判断）したのだと読む。なんとなれば、〈感じ、… 想像する〉も〈âme〉中で、唯一「意志」の、すなわち「働きかける」能動的能力に組み込まれてあるからである。それに上記引用のうちで、〈脳〉は〈働く〉の、また〈感じ、… 想像する〉ことは〈問題である〉の各主語に相当する。一つの文章に二つの主語を用意したことは、彼が同じ〈脳〉でありながら、そこに二つの〈âme〉を文面に明記させずとも、想定していたことを示唆させる。だから筆者が前記したように、〈脳〉には〈âme〉とみなされる部位が二つあるということになる。詳細は後述に譲るにせよ、上記引用中の〈脳〉は〈腺（H）〉なる部位と、〈感じ、… 想像する×脳〉は〈脳の中樞部位〉となろう。

ただ上記引用で今一度確認し注目されるべきは、〈感じる〉や〈想像する〉諸能力がそれぞれ、〈問題である〉のはどうしてかをデカルトは語らねども、〈問題である〉となすことが（「〈問題である〉となす」ことはここにあって諸能力が「働きかける」に換言されることが可能になることである）、この〈脳の中樞部位〉の諸能力が「働きかける」ことにおいて、一方の〈腺（H）〉という〈脳〉は、… 〈働く〉にかかり、この逆ではないということにある。だから引用文②の〈脳〉に対しては、彼がそこで明示する〈esprit〉とは違う〈âme〉という表現が、あるいはたとえば引用文②に従っていうと、〈感じる〉や〈想像する〉ことの各〈思惟する×脳〉に対しても〈âme〉という表現が当てはめられることが不可欠となったわけである。〈脳〉と記される箇所をおよそ〈脳〉として理解するだけでよい場合があろうが、それでも〈脳〉をときに〈âme〉と受け取らずして、引用文②や他の諸作品でも多く語られる場合の〈âme〉はいったい何かとなろうし、その〈âme〉を欠かせば、〈esprit〉の打ち立てられんとした根拠さえ見失われるはおろか、〈âme〉とした二つの「部位」の役割も定かにはなり得ぬであろう。そのうえもはや、この二つの「部位」以外の〈脳〉の部位が〈âme〉とみられたり、〈問題である〉と意志（判断）する、すなわち〈思惟〉したりすることもないであろう。また〈脳〉の二つの「部位」を〈âme〉と捉えずに、〈脳〉の他の部位や全体をさしてたんに〈思惟する〉というのであれば、彼はどうして〈âme〉のこと、ならびにその二つの「部位」のことを提起し得たのかであろう。引用文②にあって、彼の暗示しよう〈脳〉の二つの「部位」が各〈âme〉と呼ばれるからこそ、〈âme〉は〈esprit〉との並記が、または対峙が許

されると同時に、その〈感じ、… 想像する〉諸能力も、たとえば引用文⑰⑱と⑲の諸能力を〈esprit〉ばかりではなく、〈âme〉の諸能力として見立て利用し得るといわねばならなくなるであろう（次いでに一方の〈esprit〉（これは今回の検討課題ではない）について、引用文㉑の範囲で触れおくと、〈esprit〉は〈脳から独立〉していたがゆえに、〈脳〉のいづれことも、ましてやその二つの「部位」たる各〈âme〉とも関係せずに、〈純粋な思惟作用をなす〉ことにのみかわることが、しかして〈純粋な思惟作用をなすことが問題である〉とは〈esprit〉がその〈思惟〉をしてまさに「働きかけ」させているのをさすことが、さらに〈純粋な思惟作用〉からなぜ〈感じる〉や〈想像する〉が除かれるかは、この諸能力だけが身体の諸能力と関係するからして、〈âme〉としての〈感じる〉や〈想像する〉は〈esprit〉に関与することはないと、したがって引用文⑰⑱と⑲の諸能力を〈esprit〉の諸能力と捉える際にも一見できよう〈imaginer〉や〈sentir〉は、これらが記されていてもそうあるだけであって、これらをば実際〈作用〉させずに済ませてよいと読み得ることが確認されていなければならないのである）。

デカルトのいう〈脳〉が〈âme〉と理解される場合を引用文㉑でみてきたことを踏まえつつ、さらに理解しておけば、筆者は㉑の原文中の〈car〉以降に記される〈脳〉は〈腺（H）〉という〈âme〉⁽¹⁴⁾であり、そこに同じく書かれる〈sentir（感じる）〉や〈imaginer（想像する）〉の諸能力を配するも〈脳〉であると語られるにあっては、この〈脳〉は〈脳の中枢部位〉という〈âme raisonnable〉⁽¹⁵⁾になろうと指摘できるのである。そして前記⁽¹⁶⁾した通り、〈âme raisonnable〉が〈問題である〉といわば意志（判断）なる〈思惟する〉ときに、この〈âme raisonnable〉から〈思惟する〉一能力の〈sentir（感じる）〉や〈imaginer（想像する）〉がもう一つの〈âme〉になろう〈腺（H）〉をめぐりて〈働きかける〉といえし、そのことがまた、〈腺（H）〉であろう㉑の〈脳は… 働く〉ことを意味させるわけである。こうしてこそ、彼のいう〈脳〉は〈âme〉になるだけでなく、〈âme〉すなわち〈脳〉（腺（H）さらには脳の中枢部位）の役割（たとえば〈腺（H）〉では〈sentiment〉や〈imaginacion〉が生み出されるように、〈腺（H）〉である〈脳は… 働く〉役割にある。そのとき〈腺（H）〉は次段落に記す通り、「精神」となる。）すら浮かび上がるということである。

さて筆者は、デカルトのいう〈âme〉の役割や用法をとりあえず提示したと

みるうえは、この〈âme〉ばかりか、〈esprit〉に対してもはじめて「精神」⁽¹⁷⁾という訳を添えることができる。〈âme〉はギリシア語「ψυχή (靈魂) (psykhē)⁽¹⁸⁾」のラテン語訳「anima (息 (吹き), 風)」に由来してあり、「anima」が「air en qualité de principe vital, d'où âme, vie (生命原理としての風であるので、âme や命 (生))」⁽¹⁹⁾になるとされる。それゆえ〈âme〉には前記での註(8)や註(9)の〈栄養を取り、成長 (する) 原理〉や〈思惟する原理〉なる解釈が付与されるようになったと察知し得るわけである。なんとすれば、「anima (風)」から〈âme〉のほか、たとえば〈animal (動物)〉のごときこれらの造語はいずれも「動きのある (動く)」ものであっても、こと〈âme〉の「動く」はそこに〈思惟する原理〉(働きかける動き)をも含む以上、血液のみの「心臓」ではなくして、〈脳〉の「動く」をさすと指摘しなければならぬからである(ただこの「動きのある」〈âme〉はいつか動かなくなる、つまり不死であり得ずに、死ぬということが予想される)。それでデカルトは、引用文②でこの伝統的な〈原理〉の用法の容認を前提にしつつ、さらにこれに引用文③で〈脳〉のこゝを持ち出し整合させるからして、〈脳〉がその伝統的な〈原理〉を有する〈âme〉と、かつ彼だけにとどまらず、筆者にもかかる〈âme〉が「精神」に当てはまるとみなさざるを得なくさせるのである。

しかしながらデカルトは確かに、〈âme (精神)〉を〈栄養を取り、成長する原理〉と〈思惟する原理〉をもって成り立たせようが、筆者にすると、これらの〈原理〉の用法は何より、既出引用文⁽²⁰⁾中の〈小さな腺〉や引用文④での〈脳〉すなわち〈腺 (H)〉(すなわち〈âme (精神)〉)という部位と、とくに〈思惟する原理〉の用法において後段で問う〈脳の中樞部位〉(すなわち〈âme raisonnable (理性的精神)〉)以外の〈脳〉にて可能となるのではないと繰返し指摘しておかねばならない。〈脳〉の各部位である〈腺 (H)〉(以下〈腺〉とのみ記す)と〈脳の中樞部位〉には、その既出引用文に〈精神 (âme) というものはこれがその機能を直接に発揮する小さな腺〉と記されるがゆえに、こうした〈âme〉の役割が、つまり〈âme〉としてこれらの〈原理〉を実現させる役割が担われていると語られることになる。註(20)を参照しよう。デカルトが「l'âme」と記し、筆者が〈精神というもの〉と訳した精神には、まず〈これが〉とされる〈これ〉に対してはその精神の一である〈脳の中樞部位〉たる〈理性的精神〉が充当されるし、さらに〈その機能を直接に発揮する〉を〈理性的精

神)の諸能力(たとえば上記している〈sentir〉や〈imaginer〉)の働きかけと捉え、この諸能力が〈小さな腺〉に働きかけることをもって、その〈腺〉さえが〈精神〉にみなされることも含意されると読み得るのである。そして彼が前記したこれらの〈原理〉をして、彼独自の解釈となろう、〈腺〉と〈脳の中樞部位〉における〈動物精気(血液)〉と〈神経〉とに委ねたらしめることによって、これらの〈原理〉は活かされてこよう(後述)。別言すると、彼は〈動物精気〉に〈栄養を取り、成長する原理〉と〈思惟する原理〉の因を、かつ〈神経〉には〈思惟する原理〉を関係させることで、これらの〈原理〉を一挙に解決し、要するに継承したことを、また彼独自となるこれらの〈原理〉の用法を提示した(この用法は筆者が「これらの原理の理解は彼独自の理解へと展開する」と前記したことに通底する)ことを証明してみせたということである。つまり筆者がすでに指摘してきた⁽²¹⁾ように、彼は〈動物精気〉がわけても〈脳〉の入口より〈腺〉に達しようその〈腺〉までにおいて、〈動物精気〉たる〈血液〉中に〈栄養〉や〈思惟する〉素材(身体の感覚や想像)を〈混ぜ〉加えて〈腺〉に運ぶ場合のあること(ここは〈腺〉のことであるからして、〈孔〉の場合は問われない)を、またこの〈腺〉である〈共通感覚〉や〈想像〉の各〈座〉に対応して達した身体の感覚や身体の想像に、〈理性的精神〉の諸能力の一である〈sentir(感じる)〉や〈imaginer(想像する)〉がそれぞれ〈神経を介して〉(次段落の註(22)を参照)働きかけることを主張していたからである。

それでもなぜ、〈思惟する原理〉が〈精神(腺)〉によりもむしろ、前段にも記しておいた〈理性的精神(脳の中樞部位)〉にあると断じることができるのか。これを解き明かすは、引用文②①での〈何かを感じ、あるいは何かを想像するとき〉という語句であり、既出引用文⁽²²⁾の〈精神(âme)〉が神経を介して受け入れる(働きかける)という文章なのである。そこで②①中のまず〈何か〉とは〈腺〉である〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉にそれぞれあろう身体の感覚や想像である。そして〈何かを感じる×sentir〉は身体の感覚を〈感じる〉こと、〈何かを想像する×imaginer〉は身体の想像を〈想像する〉ことになる。だから筆者はその〈感じる〉や〈想像する〉を〈腺〉の諸能力であるとみなしはしない。〈感じる〉や〈想像する〉は、上記した文章中の註(22)の〈精神(âme)〉の当の諸能力のおのおのでなければならぬと捉える。なんとすればこの〈精神〉こそ〈理性的精神〉だからである。〈感じる〉も〈想像する〉も〈思

惟する（原理）に含まれるがゆえに、〈思惟する原理〉は〈理性的精神〉になくしてはならないといっておく。

②Par le mot de penser, j'entends tout ce qui se fait en nous de telle sorte que nous l'apercevons immédiatement par nous-même; c'est pourquoi non seulement entendre, vouloir, imaginer, mais aussi sentir, est la même chose ici que penser.⁽²³⁾

わたしは思惟するという語を、わたしたちのうちにつくられるもののすべてであり、わたしたちがそのすべてを直接に知覚する、という意味で用いる。それゆえ理解する、意志する、想像することだけでなく、感じることも、ここでは思惟することと同じである。

このように、デカルトが〈感じる〉や〈想像する〉も〈思惟する〉に組み入れていることは明らかである。となると引用文⑨は別にして、引用文⑰と⑱もこの②（〈それゆえ〉以下の記述）と同じく、〈esprit〉における諸能力のことだけでなくして、〈âme〉わけても〈理性的精神〉としての〈âme〉における諸能力のことを示すようになろう（〈思惟する原理〉が〈腺〉にないといえるのは、〈腺〉が〈感じる〉や〈想像する〉を註(20)のように、〈直接に発揮する〉のではなく、それぞれが〈腺〉からみれば、そこに受容されるからである。また引用文⑳の〈それゆえ〉以前の文脈にあって、筆者は〈わたしたちのうちにつくられるもののすべて〉が二つの部位のおのおの「精神」に各新たな能力となってあらわれる（〈理性的精神〉で産出される各能力のことは後述する）にしても、その各能力は〈直接に発揮する〉という、〈理性的精神〉の能動的働きかけである〈思惟する〉によって生み出されるとみる。繰返すが、この働きかけの出所はもはや〈腺〉でなしに、〈脳の中樞部位〉にあるということである）。

引用文⑰⑱と⑳（〈それゆえ〉以下の記述）の諸能力がまた「日常的用法」における〈理性的精神〉の諸能力でもあることについてはのちに検討するにしろ、果たしてこの〈思惟する（原理）〉は〈理性的精神〉にあると断じられるかを、筆者は前記した既出引用文の全文を再度持ち出し確認しておく必要がある。〈Elles (ces imaginations) n'ont pas une cause si notable et si déterminée que les perceptions que l'âme reçoit par l'entremise des nerfs.〉⁽²⁴⁾には、〈このような身体の

想像とは、精神が神経を介して受け入れる諸知覚ほどに顕著で明らかな原因を有しない」ということが記されていた。筆者がこの註(24)全体からいえる〈身体の想像〉を、前号にて「〈受動〉としての想像」⁽²⁵⁾と指摘したのを踏まえるならば、「〈受動〉としての想像」は、すなわち身体に起因する一〈知覚〉(これは引用文㊟によると〈つくられるもののすべて〉)の一であり、〈痕跡(観念)〉である)はもちろん、一方でいう〈精神が神経を介して受け入れる諸感覚〉とは異なって捉えられる知覚でなければならぬことに気づかされるであろう。かつ「〈受動〉としての想像」が「一方でいう」と記した知覚と相違しよう知覚になることは、その〈身体の想像〉が〈脳の中枢部位〉と関係しないことから生じると察知できるのである。つまりその〈身体の想像〉は〈脳の中枢部位〉が〈受け入れる諸知覚〉とも同じでないということである。〈脳の中枢部位〉が〈受け入れる諸知覚〉は、たとえば〈腺〉(またはこの〈想像の座〉)に到達した、身体からくる想像に、〈脳の中枢部位〉がかかわって成る一〈知覚〉であるが(「〈受動〉としての想像」は〈腺〉に関係しない)、しかし身体からくる想像が〈腺〉に達しただけでは、この身体の想像はいまだ〈痕跡(観念)〉になり得ない一〈知覚〉である、別言すると身体からきて〈腺〉にとどいた想像に、〈脳の中枢部位〉の〈想像する〉が関与して、〈腺(精神)〉としての〈想像〉すなわち〈痕跡(観念)〉を産出していない一〈知覚〉なのである。

それにしてもここでいう〈諸知覚〉の〈諸〉は何か。実は註(24)の文脈からいえることは、〈顕著で明らかな原因を有〉する〈諸知覚〉には、本来身体から〈腺〉に達する〈外的感覚〉や〈内的感覚〉を起因として誕生する各〈知覚〉(「能動的 sentiment」たる〈痕跡(観念)〉)が充当せずにおれないということにある。だが今筆者が前段の身体から〈腺〉にとどく想像を例にし、その際の〈諸知覚〉をばすでに語った「たんなる想像」や「悟性を手助けする想像」などと捉え得るならば、この〈諸〉(〈痕跡(観念)〉)をかたちづくるに貢献するは、筆者のいう「外的想像」や「内的想像」しかないであろう⁽²⁶⁾ということができる。つまりこの場合「外的想像」や「内的想像」が〈知覚〉を複数表記する因子になる。ところがこれも指摘しておいたように、デカルトは身体からくる「外的想像」や「内的想像」たる想像に関して、筆者による二つの区別にもかかわらず、そのことを明記しはしないとみた。だから彼の取り上げる想像は、〈孔〉⁽²⁷⁾はおろか、〈腺〉に達した場合でも、およそ身体の外か内のいづこから

きて誕生する〈諸知覚〉になり得るといえるか定かにさせないわけである。

以上から想像における〈諸知覚〉にかぎってまとめおくと、〈諸〉は身体からくる想像が〈腺〉にとどくところという〈知覚〉と、これに〈脳の中樞部位〉の〈想像する〉が関与して、〈腺〉で今度は身体のでなしに、精神としての想像をもたらし際のその〈知覚〉を含めて語られることになる。ただし前者の〈知覚〉と後者の〈知覚〉とを同列の知覚と断じてならないことは確かである。あくまで前者は身体の〈知覚〉であり、後者は精神の〈知覚〉である。しかし両者の〈知覚〉は、〈脳の中樞部位（理性的精神）〉の〈imager〉が〈腺〉の身体の〈知覚〉に関係し、〈腺〉に新たな〈知覚（想像）〉をもたらしことによって、一連のつながりがあることを意味させる。と同時にそこに留意されるべきは、〈腺〉の身体の〈知覚〉が「新たな〈知覚〉にならないかぎり、〈腺〉はまだ精神と捉えてはならないことなのである。だからこそ、註(24)の〈l'âme（精神）〉なる語を〈腺〉と置き換え理解することは不可能であるばかりか、この〈腺〉の方から〈脳の中樞部位〉に関係する、すなわち〈受け入れる（「働きかける」）〉とみることも不可能なのである。

註(24)中の〈精神〉が〈腺〉にみなされるにあつては、〈精神〉以下の文章の一部は〈腺〉が神経を介して受け入れる諸知覚）になろう。そのとき〈神経を介して〉や〈受け入れる〉や〈諸知覚〉はどう解釈されるかが問題である。まず筆者は〈受け入れる〉や〈諸知覚〉のことを質す。〈受け入れる〉語をその語意のままに捉える場合、〈腺〉が〈受け入れる〉は、たとえば身体からきて〈腺〉に達した想像をその都度〈受け入れる〉ことであるから、この身体の想像はたえず単数の〈知覚〉となるのであって、複数の〈諸知覚〉の表現で語ることができなくなる。〈腺〉に達した身体の想像たる〈知覚〉はこれがゆえに、〈脳〉である〈腺〉と関係する²⁸⁾。それはこの身体の想像に、〈脳（腺）は... 何かを想像するときに働く〉という本稿引用文②をかかわらせ考察すると、この文章中の〈何か〉には身体からくる想像（身体の想像）が充当せずにおれないからである。しかしそこで同時に強調しておくべきは、〈腺〉が〈想像する〉のではなかったということである。再三繰返すが、〈想像する〉は〈脳の中樞部位（理性的精神）〉の一能力でしかないこと、この能力が〈腺〉の身体の想像に「働きかけ」ては、新たな想像なる〈知覚〉すなわち〈痕跡（観念）〉を〈腺〉にもたらしときに、〈腺〉はまさしくそのように〈働いたこと〉になる（〈腺〉のかか

る〈働く〉という働きがあるまで、身体の想像は上記した新たな想像なる〈知覚（〈痕跡（観念）〉）〉になり得ない〈知覚〉である）こととともに、〈腺〉がこうして〈理性的精神〉たる〈精神〉と密接にかかわるからして、筆者はこの際の〈腺〉をもはじめて〈精神〉と認め得る（註(20)引用文⑩参照）ことが明かされるといえるのである。だから註(24)の〈諸知覚〉は当然、〈腺〉が〈精神〉としての新たな〈知覚〉を産出するところで語られる〈諸知覚〉となる。〈諸〉とは註(24)に関し前記したことでいうと、何より身体からくる〈外的感覚〉や〈内的感覚〉のそれぞれに対して、〈理性的精神〉の〈感じる〉が「働きかけ」て、〈腺〉で新たな感覚（「能動的 sentiments」）を生み出すがゆえの、その〈諸知覚〉の〈諸〉であったわけである。これは「外的想像」や「内的想像」と〈想像する〉とが関係する場合を想定してさえ同様のことになろう。

一方に〈理性的精神〉の能力とみた〈想像する〉が記される以上、これと〈腺〉とを何んとかして関係させないことには、〈想像する〉は何んの役にも立たないどころか、その引用文⑩を書き残すこと自体が無意味となる。そこで前段のことも含めた以上の筆者の問題点に立ち戻ると、註(24)中の〈精神〉を〈腺〉と見立て、〈腺が…受け入れる諸知覚〉となったにしても、この〈受け入れる〉を前記した「〈受け入れる〉という本来の語意」で受け取れないといえるのだから、これをはじめとすることにおいて、この文章の主語は〈腺〉でもなくなるし、また〈腺〉に〈諸知覚〉が最初からあるのでもなくなるということである（註(24)全体の解釈は次段落以降に譲る）。ただ註(24)の一部を検討するに、突如引用文⑩を引用して上記のように解釈するは異議がなくはないとみられるにちがいない。しかし筆者はデカルトが語り、筆者が名付ける「日常的用法」での認識論的思想にあっても、かかる思想が整合していなければならぬとする立場を保持するからして、何かに他の何かを必要とするならば、他の何かを取り入れることは否定されるべきではないと断じ得るのである。とまれその立場に立つことでは、〈腺〉と〈想像する〉が関係せずにおれない、しかも関係の仕方は彼にとって、〈想像する〉がつねに〈能動〉の能力と捉えられているから、〈想像する〉の方から〈腺〉に、つまり〈脳の中枢部位（理性的精神）〉の方から〈腺〉に「働きかける」かわりになくてはならなかったわけである。そこで註(24)のかの〈受け入れる〉はどうしても、〈理性的精神〉の引用文⑩の〈想像する〉が〈腺（の身体の想像）〉に「働きかける」という「働きかける」

意味にしかならない。だからといって、たとえば〈理性的精神（脳の中枢部位）〉と〈腺〉の関係は以下のように導き出されてもならない。註(24)中の語〈精神〉に対し〈理性的精神〉と置き換え、その部位たる〈脳の中枢部位が…受け入れる諸知覚〉とするは許されようが、しかしこの〈受け入れる〉が「働きかける」意味でなしに、前記のような「本来の語意」に受け取られるならば、これは〈脳の中枢部位〉が〈腺〉から〈諸知覚〉を〈受け入れる〉ことを、また〈想像〉のことを例にいうと、その精神としての「たんなる想像」や「悟性を手助けする想像」などの〈想像〉なる〈諸知覚（痕跡や観念）〉の誕生さえ〈腺〉ではなく、〈脳の中枢部位〉に起因してくることを示唆させるだけであろう。するとデカルトが精神としての〈感覚〉と同様、かかる〈想像〉も〈腺〉で生じるとあれほどまでに主張するのは、いったい何んであったのかとなろう。だからこうした見方ももはや論外であると断じおかねばならぬのである。

註(24)中の〈精神〉が〈腺〉と置き換えられ、その〈腺が神経を介して受け入れる諸知覚〉として、〈神経を介して〉たる語句を付加させた際の〈神経を介して〉とは何かである。結語を先きにいうと、〈腺〉はこの場合、〈動物精気〉を介するのであって、〈神経を介〉することはない、したがって註(24)に使用されるこの〈神経を介して〉たる語句からいっても、〈精神〉が〈腺〉とみなされることはないのである。〈神経を介して〉はデカルトにあって、意外に多用される語句である。たとえば上記引用以外に、筆者が今まで完全に注釈せずにいる既出引用文⑨、つまり〈知覚はすべて、神経を介して精神にあらわれる〉もそうである。しかし既出引用文⑨と註(24)の〈神経を介して〉は各文脈から、その意味を異ならせる語句でしかなくなる。しからばどう相違するのか。筆者のみるところ、既出引用文⑨に記されよう〈神経を介して〉は、〈外的対象〉ならびに〈身体（の一部）〉からくる身体感覚や想像を〈脳〉の入口まで伝えんとする「求心的」な〈神経〉をさして語られるが、註(24)はこれと逆な「遠心的」な〈神経〉を意味させることにある。ここで前者に関した説明が試みられる（後者については以下の二段落目で触れる）。

既出引用文⑨を「完全に注釈せずにいる」のは、なるほど〈知覚はすべて〉、「求心的」な〈神経を介〉するは正しいといえども、デカルトが続けて〈すべて〉が〈精神にあらわれる〉と記すに及んで、筆者はその〈知覚〉が、この〈知覚〉の誕生のおかげで〈精神〉になるとされるあの〈腺〉にでなしに、〈孔〉

に〈あらわれる〉例をこれまでに指摘してきたが、果たして〈孔〉は〈精神〉であり得るか、彼のさらなる作品からの読解を今だに課しているからである。〈精神〉はここでも (l'âme) と書かれる以上、「総称」と受け取られてよい。そのとき〈精神〉には〈腺〉と〈脳の中枢部位〉が含意されていた(ただし繰返すが、〈腺〉が〈精神〉とみられるは、〈腺〉に新たな〈知覚〉が生まれることをさしていた)。だがこの場合、〈精神〉は〈脳の中枢部位〉であることはない。〈脳の中枢部位〉であるというならば、身体感覚が〈腺〉である〈共通感覚の座〉に、身体想像が〈腺〉である〈想像の座〉に達するとした既出引用文⑤や⑫ならびに同⑩は、いったい何んのために記されたのであろうか。彼に〈腺〉のことがこのように強調されるは、〈脳の中枢部位〉が、身体感覚や想像がまずは〈腺〉に達する前提でしか関与できないということなのである。すると既出引用文⑨の〈精神〉はこの〈腺〉のことであるとの帰結が可能になってこよう。しかしそれではさらに筆者の注釈を困難にする。筆者がこの注釈に苦しむは、既出引用文⑨の文脈を、身体感覚や想像が「求心的」な〈神経を介して×脳〉の入口にとどくが、それでも〈脳〉の入口以降から〈腺〉に到達する間にかけて、身体感覚や想像はもはやその〈神経を介して〉ではなく、「求心的」な〈動物精気〉を介すると読むにあって、このときの〈腺〉を真に〈精神〉にみなし得るかという疑問がたえず脳裏にあるからである。身体感覚や想像は、それぞれがいわば身体のままの〈知覚〉となつてとどくであろう〈腺〉をして〈精神〉たらしめ、かつ〈精神〉にあらわれると表現されることが、彼の今一つ鮮明でない誤記か、筆者の誤読になるかとの結語はともかくも、その身体各能力が〈精神(腺)にあらわれる〉と書かれたうえは、これこそ少なくとも〈腺〉が一に、〈神経を介〉してきた身体各能力を〈脳〉の入口で、あるいは入口以降から〈腺〉まで、もはや〈神経を介〉させるのではなく、〈心臓〉より〈脳へとのぼる×血液〉たる〈動物精気〉と〈混ざる〉ごとくにかかわらせること、要はまさにこの〈動物精気〉だけに委ねさせることによって、一に、身体感覚や想像をおのおの精神の感覚(「能動的 sentiment」)や想像(imagination)にしよう部位として〈働く〉ことによって、〈精神〉を暗示させる証左になるはずである。ただし他方でいう、註(24)の〈神経を介して〉は既出引用文⑨のそれと相違して、繰返し確認するが、〈腺〉や〈脳の中枢部位〉からみるに、「本来の語意」で受け取られる〈受け入れる〉は〈脳〉の入口までの

あくまで「受動的」「求心的」な〈神経〉にすぎないにしても、これには〈脳〉内の当の〈腺〉や〈脳の中枢部位〉のいずれも関係しないところで語られるし、現にそこに〈神経を介して〉と書かれる以上、これとかかわるは次段落でも明かすように、〈腺〉ではなく、〈脳の中枢部位〉であり、〈脳の中枢部位（の能力）〉がいわば「能動的」「遠心的」な〈神経を介して×腺〉に〈受け入れる（働きかける）〉ところで見出されるということになる。

そこでこの註(24)の全訳文〈このような身体の想像は、精神が神経を介して受け入れる諸知覚ほどに顕著で明らかな原因を有しない〉をここに再度記し、今度はその全体の文脈から、問題の〈神経を介して〉は「遠心的」な〈神経〉でしかなく、それが証左されなければならない。なんとなれば、すでにみた既出引用文⑨で〈知覚（身体の感覚や想像）はすべて、神経を介して精神（腺）にあらわれる〉（全訳文に括弧を添えるは筆者）といい得たからといって（そこでこの〈すべて〉は今では不問にすることは、また〈神経を介して〉の〈神経〉は「求心的」な〈神経〉であることは触れた通りである）、すぐさま註(24)中の〈精神〉に〈腺〉が当てはめられたり、これをもって〈腺が神経を介して〉とみなされたりしてはならなかったからである。もしこの〈精神〉が〈腺〉に置換され、〈腺が神経を介して...〉が許されるならば、〈腺〉はいったいどこと〈神経を介〉するのであろうか。その「どこと」に対して、たとえば〈脳の中枢部位〉が適当するともみられよう。そうだとすると、しかし〈神経〉は、〈腺〉から〈脳の中枢部位〉へではまったくなく（こうした伝わり方の〈神経〉は〈脳〉内ではないと指摘した）、〈脳の中枢部位〉から〈腺〉へと伝わるかかわりでの〈神経を介して〉としてあるのでなければならないのである。このことは、本稿引用文⑩中の〈脳（腺）は、...何かを感じ、...何かを想像するとき働く〉（括弧内はすでに語ったことである）という一文を取り上げるまでもなく、諒解できるように、要はこの〈感じる〉や〈想像する〉が、〈脳の中枢部位〉の各能力にもはや充当するほかなく、また註(24)の語である〈受け入れる〉とは筆者のいう「働きかける」〈能動〉になる、その「働きかける」〈ときに〉（あるいは各能力の働きかけがある〈ときに〉）はじめて、〈脳（腺）は、...働く〉とてよいかかわりにあるのと同じことなのである。だから〈腺〉が〈働く〉とみられるには繰返すが、〈腺〉ではなしに、〈脳の中枢部位〉にあるとされる〈感じる〉や〈想像する〉能力が不可欠となるし、ここから註(24)にあって、そ

の各能力の見出される〈精神〉は、新たな各〈知覚（痕跡または観念）〉の産出後、〈精神〉の名称に「すりかえ」られる〈腺〉ではなくして、〈脳の中樞部位〉とどのつまり端からこの別名になる〈理性的精神〉であるとされる必要があったわけである。だからまたこの〈精神〉が〈神経を介して〉に関係してくるはいうをまたないと同時に、〈受け入れる〉はこのときすでに「本来の語意」であり得ずに、〈(理性的精神が神経を介して)「働きかける」〉意味でなければならなくなるのである。

以上を踏まえて、註(24)に残された語句の説明をしつつ、その全文解釈に移ることができよう。ただ筆者はこれを一度は本稿で、また別稿（たとえば註欄註(24)の括弧内参照）で試みたからして、ここでは全文を視野に入れて、〈神経を介して〉の〈神経〉が「遠心的」な〈神経〉であると明かすのを日途にするだけで十分である。まずその際、鍵となる語句は〈諸知覚〉ならびに〈顕著で明らかな原因を有しない〉である。これらの語句の間には〈ほどに〉が結びつくから、それはまた④〈顕著で明らかな原因を有しない×諸知覚〉と㊦〈顕著で明らかな原因を有する×諸知覚〉とがあることを示唆させている。かつここから、④に相当するは〈このような身体の想像〉であり、㊦に相当するは上記「別稿」とした註欄で一見し得る通り、〈感覚（「能動的 sentiments」）〉であるからして、この〈諸知覚〉は既出引用文⑤や㊧（次号註(76)参照）で指摘されるがごとく、〈腺（の表面）〉にて表象されるとみなければならなかったわけである。次に、ここではその〈感覚〉の言及はともかく、一方の〈このような身体の想像〉について語ると、これはもとより、註(24)全体の主語に充当し、〈(諸知覚ほどに顕著で明らかな原因を)有しない〉を述語にすると同時に、この〈諸知覚〉と比較されるためには、かかる主語はこの〈諸知覚〉と何より同じ土俵（ないしは同じ段階）にある〈知覚〉であることが文脈上、課せられていたと捉えおかねばならない。要するにかかる主語は前記した語でいえば、〈諸知覚〉と「同列」の〈知覚〉としてあるがゆえに、〈このような身体の想像〉はたんに〈孔〉において身体の想像にのみとどまる〈知覚〉ではなく、〈孔〉で産出されよう「〈受動〉としての想像」なる〈知覚（痕跡または観念）〉⁽²⁹⁾である必要がある、別言すると〈(理性的)精神が神経を介して受け入れる（「働きかける」）諸知覚〉と記される際の〈諸知覚〉もまたすでに諸〈痕跡（観念）〉なのだから、その〈諸知覚〉のそれぞれがいまだ〈腺〉に達しただけの、〈痕跡

(観念)であり得ない身体感覚と受け取られてはならない⁽³⁰⁾ということである。上記「別言すると」以下の引用文中の「働きかける」諸知覚)とした真意は、この場合は〈諸知覚)にさらに〈顕著で明らかな原因を有する)という修飾語句がつくと判断できるからして、〈精神(腺)としての〈諸知覚)で、あるいは筆者が語った「精神としての諸能力)であらねばならない、それは〈理性的精神)の〈sentir(感じる)が〈腺)に達した身体感覚に「働きかけ」て、〈腺)で「新たな」〈知覚または「能動的 sentiment」たる能力)を生み出すことをはじめとして、〈諸知覚(諸能力)が〈精神(腺)にてつくられるところにこそある。そして、上記引用文中の〈諸感覚)はしかし、〈sentir)ならびに〈imaginer(想像する)そのものでないと知ることである。なんとなれば、本稿引用文⑬に記される通り、〈感じる)や〈想像する)は「新たな」〈諸知覚(諸能力)を誕生せしめる因としての各能力にすぎないのであり、各それ自身が〈知覚)であることは不可能となるからである。さらに、註(24)の全体での主語〈このような身体の想像)はこれも前記したように、デカルトがそこで〈身体の想像)と記すといえども、ここに指示形容詞も修飾するからして、〈孔)においてたんに身体の想像にとどまるそれではないことが、しかし〈孔)を〈精神)とみるかについては、今一つ不鮮明なところがあるため、次なる課題として残すにしろ(次回以降検討)、ここでは〈孔)におけるこの〈身体の想像)を一応精神の〈想像)と見立ておくというしかなくなる。また〈このような身体の想像)が〈諸知覚)ほどに顕著で明らかな原因を有しない)のは、既出引用文⑫④で知り得るごとく、〈動物精気が多様に動かされる)という原因をかかるといふことである。さらにまた、以上のようなことを基にしては、註(24)中の〈諸知覚)と〈sentir)は相即不離にあるのだから、現在問うていて決着を急ぐべきかの〈神経を介して)という解釈は、〈腺)と〈脳の中枢部位)との間での〈神経)でなければならない、しかも〈脳の中枢部位(理性的精神)の〈sentir(感じる)が〈腺)に関与してはじめて〈諸知覚(「能動的 sentiments」)を生み出すうえで、この〈神経)は〈脳の中枢部位)から〈腺)にいわば橋を架ける「遠心的」な〈神経)でなければならないところに見出されるといえるわけである。換言すると〈諸知覚)の誕生に向けて、〈理性的精神)の〈感じる)がいかにかに〈腺)に伝えられるかは、この〈感じる)が〈働きかける×能動)ゆえに、「遠心的」な〈神経を介して

×腺)に伝わる以外にないということである。たとえば〈腺〉に関する身体の想像をして〈imaginations〉たる〈諸知覚(痕跡または観念)〉たらしめるには、〈(理性的)精神が(動物精気ではなく)神経を介して受け入れる〉ことが、つまり「遠心的」な〈神経を介して×脳(腺)〉に「働きかける」〈想像する〉ことがどうしても欠かせなくなる。この〈腺〉がそこで実際に〈諸知覚(痕跡または観念)〉をかたちづくり、〈âme(精神)〉と語られるようになるは、〈imaginer(想像する)×能動〉的能力を〈神経を介して×脳(腺)〉に送り込む〈脳の中樞部位(理性的精神)〉のことが持ち出されてはじめて実現するのである。

もし〈想像する〉が〈腺〉の能力であるとみなせば、前記した註(24)中の〈精神が神経を介して受け入れる諸知覚〉とは何か、引用文②中の〈脳は...何かを想像するときに働く〉とは何かと、また既出引用文⁽³¹⁾中の〈lorsqu'étant unie à cette machine elle (l'âme raisonnable) imaginera ou sentira quelque objet. (この機械(身体または脳としての腺)に結合された理性的精神が何らかの対象を想像したり感じたりするときに)(括弧内は筆者)〉とはいったい何んのために用意される文章なのかと問い続けなければならぬであろう。まずその註(24)において、〈精神〉が〈腺〉の〈想像する〉に置換される場合が想定される⁽³²⁾。だが〈精神(腺の想像する)〉が神経を介して受け入れる諸知覚となることはこれまでに触れてきた通り、認められはしない。容認は〈腺〉がその〈想像する〉にあって〈諸知覚〉をたんに〈受け入れる〉ことを暗示させ、〈腺〉における〈諸知覚(痕跡)〉の誕生を否定してしまうからである。また〈神経を介して〉が〈神経〉を間に立てる意であるとしても、〈想像する〉が〈腺〉の能力とされるのだから、〈想像する〉が〈神経を介〉するのか、しからば〈腺〉における〈動物精気〉によって〈諸知覚(痕跡)〉が成るとみた⁽³³⁾ことはどうなるのか、そればかりか〈神経〉は〈腺〉とどこかの「間に」あるのが判明されはしない。次にその②において、〈脳〉が〈腺〉の〈想像する〉に置換される場合、〈想像する〉は二重の働きを有することが示唆されるだけであり、デカルトがこうした意図のもとに記したとは到底捉えがたいからである。そしてその註(31)とした既出引用文において、〈腺〉に〈想像する〉があるとの見立てならば、そもそも彼によってかかる文章が書き込まれること自体は「矛盾」でしかないと断じておかねばならないであろう。だからもはや「矛盾」や「不明瞭、難点」がかさねますことのないように、諸引用文を読む必要が生じてくるのである。

するとデカルトをして、前段の註(31)にたとえば〈想像する〉という能動的能力のある〈理性的精神〉のことを知らしめ、かつ〈quand Dieu unira une âme raisonnable à cette machine,... il lui donnera son siège principal dans le cerveau. (神はこの機械(身体または脳としての腺)に理性的精神を結びつけるときには、神は理性的精神の主要な座を脳の中枢部位に与えるであろう)(傍点部分(省略)は筆者)〉⁽³⁴⁾といわしめるかぎり、〈想像する〉は〈腺〉ではなく、何度となく記しおいた〈脳の中枢部位〉の能力であり、〈脳の中枢部位〉は彼のいうもう一つの精神、すなわち〈理性的精神〉となるのである⁽³⁵⁾。だから註(22)の〈精神が神経を介して受け入れる〉としたなかの〈精神〉をば〈理性的精神〉に置換させることが必要であると同時に、〈受け入れる〉を〈能動〉の意味で〈働きかける〉⁽³⁶⁾と理解せずにおれなかったわけである。なぜか。〈神経を介して〉の〈神経〉はここにあつてこそ、〈腺〉と〈脳の中枢部位〉を〈結びつける〉当のもの以外になくなるのであり、たとえば〈想像する〉が〈脳の中枢部位(理性的精神)〉からこの〈神経を介して(伝って)×腺(その想像の座)〉における身体の想像に〈働きかける〉ことなくして、〈腺(精神)〉としての〈想像(imagination)〉なる〈諸知覚(痕跡)〉を生み出せなかったからである。要するに〈理性的精神〉が〈能動〉として〈思惟する〉働きかけを促すときに、また前記したことで換言すると、〈理性的精神〉が〈何かを想像することが問題である〉といわば意志(判断)するとき、その〈想像する(imaginer)〉は〈神経を介して×腺〉に働きかけざるを得ないということである。〈精神が神経を介して受け入れる〉とした文章から、筆者は〈能動(働きかける)〉や〈神経を介して〉のことを問うとなると、この〈精神(âme)〉はおよそ〈腺〉に置換させて捉えてはならないばかりか、〈受け入れる〉の主語である〈精神〉は〈思惟する〉という〈能動〉の諸能力を有する〈理性的精神〉であり、〈理性的精神〉が〈働きかける(受け入れる)〉ことでしかないと認め得るのである。さらにこれらの語を用いて、〈理性的精神が神経を介して働きかける諸知覚〉に置き換えるなかで、〈諸知覚〉とはここも前記したことに従わせると、〈imaginer〉が〈働きかけ〉た結果は、〈腺〉にある身体の想像を今度は〈精神(腺)〉の新たな能力にするほかなくなるわけである。これこそ〈諸知覚〉すなわち〈痕跡〉の出所である、〈精神〉とみなさずにはおかない〈腺〉における〈想像(imaginations)〉なのである。

そして筆者は引用文⑳中の文章を読むために、〈諸知覚（痕跡）〉たる〈imaginations〉は〈腺〉が〈受け入れる〉身体の想像ではまったくなく、しかしその身体の想像に〈理性的精神〉の一能力〈imager〉が〈働きかける〉ことによって〈腺〉で成る能力であり、そこで〈腺〉ははじめて〈精神〉とみなし得ることを繰返しておく。㉑の〈脳は... 何かを想像するときに働く〉という文章に、上記使用の語を当てはめてみると、〈脳〉すなわち〈腺〉は、〈理性的精神〉の〈imager〉が〈腺〉に対して〈受け入れ〉た〈何か（身体の想像）を想像する〉ように〈働く〉、つまり身体の想像に〈働きかける〉ことができるように〈働く〉、換言するとその〈imager〉が〈何かを想像する（何かに働きかける）〉ことは〈腺〉にとって〈腺〉に産出される〈想像〉たる〈諸知覚（痕跡）〉を〈recevoir（受け入れる）〉ことと同じであるように〈働く〉し、〈受け入れる〉際は〈精神（âme）〉として捉えられることになるのである。

〈脳〉としての〈腺〉が〈神経〉でなしに、〈動物精気〉の〈粒子〉¹⁷⁾にもっぱら左右されるにあって、〈recevoir〉の語でなおも表現してみると、その〈粒子〉を〈腺〉に〈受け入れる〉ことになる〈受け入れる〉とは当の〈腺〉では〈受動〉にしかないから、その〈受け入れられる〉ではない以上、〈腺〉にとって適当な表現でないばかりか、〈動物精気〉にかかわるからして、〈神経を介して〉なる表現もまた〈腺〉では通用しなくなる。だから註(22)の〈精神が神経を介して受け入れる〉という文章中の〈精神〉は〈腺〉に置き換えられはしないし、〈受け入れる〉という〈recevoir〉は〈受動〉の意味なる〈受け入れる〉ではないわけである。さらに〈脳は... 何かを想像するときに働く〉という文章中の〈働く〉は、この〈働く〉ことをもって、〈脳〉すなわち〈腺〉が〈精神〉と捉えられることをさしたとみれば、今度はその〈腺（精神）〉にとっては、〈諸知覚（痕跡）〉の形成に向けて、身体の想像を〈理性的精神〉の〈想像する〉に提供すべき場として〈働く〉〈能動〉の意味をもちあわせることになければならぬであろう。要はデカルトにおいて、〈精神〉となるとみられるはその〈受動〉や〈情念〉以外何より、上記した〈働く〉が、ないしは〈能動〉たる働きかけが、すなわち〈働きかける〉ことが欠かせないということにある。これは〈腺（精神）〉でも〈脳の中枢部位（理性的精神）〉でも同様である。それゆえ再度〈精神が神経を介して受け入れる〉とした文章に戻ると、〈精神〉は〈理性的精神〉に充当したのだから、〈理性的精神〉が〈受け入れる〉とは〈働きか

ける〉と解釈され得たのである。〈受け入れる〉が〈働きかける〉という意を有するゆえんである。

〈理性的精神〉の能力〈想像する〉が〈働きかける〉ことから、〈諸知覚(imaginations)〉という複数の〈痕跡〉が生み出されてくる際、この〈imaginations(想像)〉が複数を構成するといえるのは、〈想像〉には筆者がこれまでに指摘してきた、ときに「たんなる想像」に、ときに「悟性を手助けする想像」に、ときに〈一般的な意味〉で語られている「情念になる想像」になることがみられるからである⁽³⁸⁾。ここで以上三つの〈腺〉における〈想像〉のそれぞれを再度解説する必要はない⁽³⁹⁾が、それでもこの一例としての「たんなる想像」は「「たんなる想像」を生み出すそれ用の〈imager〉の働きかけがあったからにほかならないならば、かえて「多くの他の原因」が生まれるは、この〈imager〉を原因にするといつてよいのではなかろうか⁽⁴⁰⁾」と記しおいたように、三つの〈想像〉はその産出用の各〈imager〉の中味に関与されてあることを欠いて成り立たないと推察されるのである。

それにしても、筆者はたとえば、〈何かを想像することが問題である⁽⁴¹⁾〉として取り上げるは〈理性的精神〉であると、また前段註(40)中での「〈多くの他の原因〉が生まれるは」〈理性的精神〉の一能力「〈imager〉を原因にする」とすでに明言していたのに、要するに〈理性的精神〉に註(41)の〈何かを想像することが問題である〉と意志(判断)させるし、〈腺〉に働きかける三つの〈想像する〉がその各〈原因〉を有して、〈腺〉で三つの〈想像〉を産出させると断じていたにもかかわらず、デカルトがたんに〈imager〉あるいは〈imagination〉と語るだけであったことからして、このそれぞれが筆者をして上記のごとき分類と命名たらしめるごとくにししか表記し得なかった(このことは〈sentir〉または〈sentiment〉でも同様に捉えられる)のはまだしも、どうして〈imager〉やこの〈想像することが問題である〉をば〈理性的精神〉自身ではなく、〈神〉を持ち出し、〈神〉に委ねさせるとみてとれるような註(34)を沓かねばならなかったのかである。だが筆者にすると、デカルトがたとえば、身体の想像を取り込んだ〈動物精気〉を〈腺〉に達しさせんとする「求心的」働きかけの〈機械運動〉(この働きかけは終始〈機械運動〉である)とみなすこと、〈脳の中枢部位〉の諸能力(imager)の〈神経を介して〉の〈腺〉への〈能動〉であるいわば「遠心的」働きかけの〈機械運動〉を、なかでもこの後者の働きかけを

ば〈想像することが問題である〉と意志（判断）すなわち〈思惟〉するとみなすこと、だから後者における〈imager〉もかかる〈機械運動〉のことより、〈思惟する原理〉の諸能力に見立てるとみなすこと、それどころかかかる〈機械運動〉を〈思惟する原理〉に任せることより、〈神〉に託すとみなすこと自体が、彼の真意はどこにあるかを見極める際に矛盾にみえてくる。

しかしデカルトにとって、上記のことが矛盾でなくなるのは、あくまで前記註(34)の文章が前提にされてのことであると捉え得るからである。この点でこれは軽視してはならない文章となる。〈神はこの機械に理性的精神を結びつけるときには〉から、〈神〉がいわゆる〈心身〉を〈合一する（結びつける）〉にしても、〈unir（結合する）〉は何度も指摘するように、〈理性的精神（脳の中枢部位）〉の諸能力（imagerを例にする）の〈機械（身体または脳としての腺）〉への働きかけをもって実現するし、この諸能力の〈腺〉へのかかわりによって、〈腺〉はそのときはじめて〈精神（âme）〉になるとみた。なんとなれば、〈腺〉で〈精神（âme）〉としての諸能力（たとえば imaginations など）が誕生したからである。ただし筆者にあっては、彼が〈心身合一〉があるというならば、以上に語った方がまさしく〈心身合一〉があるにふさわしいと察知し得る。つまり上記引用文においては、〈神〉が〈理性的精神〉と〈機械〉を〈結びつける〉ことだけであかかも〈心身合一〉を可能にさせると指摘できようが、しかし筆者は〈機械（身体または脳としての腺）〉が〈理性的精神〉と関係し精神（âme）になったとみられる段階でこそ、心身が合一したと読むことができるわけである。

それはともかく、註(34)の文章が筆者のいう矛盾を打ち消すといえるのは、〈神〉が〈心身合一〉の〈心〉にはじめから〈理性的精神〉を配置させておくだけでなく、続けて〈神は理性的精神の主要な座を脳の中枢部位に与えるであろう〉と記したからである。これは〈理性的精神〉が、〈腺〉がしかるのち〈精神（âme）〉になるというのとは違い、最初から〈理性的精神〉であることを、また〈神〉によって、〈機械運動〉を〈神経を介して〉可能にしよう〈脳の中枢部位〉に充当されることを示唆するにほかならない（〈神経を介して〉が記されずには、〈理性的精神〉の諸能力が働きかけるという思想は生まれてこない、逆にいうと、かかる思想が先きになければ、〈精神が神経を介して受け入れる〉という表現は書かれなかったであろうといえる。ちなみにかかる思想が記されたの

は註(31)で、『人間論』(1630年-1633年)であり、上記引用の文章は註(24)で、『Passions (情念) 論』(1649年)である。換言すると〈脳の中樞部位〉やその〈機械運動〉は当初より身体(機械)として理解されるにあらず、〈(理性的)精神〉やその働きかけを示すことでしかないということである。それゆえ〈理性的精神〉は、「〈想像することが問題である〉と意志(判断)すなわち〈思惟〉」させるところの〈思惟する原理〉を保有する⁽⁴²⁾ といつてよいのである。ここからデカルトにおいて、〈思惟する原理〉が〈理性的精神〉に見出されるというだけにとどめず、〈思惟する原理〉をして〈神〉にかかわらしめるとみられても、しかしそれがまさに彼自身の言や見解として語られているがゆえに、もはや矛盾と断じることはなさそうなのである。矛盾ではないと捉えられることは、筆者のいう「日常的用法」での〈機械(身体または脳としての腺)〉やその〈機械運動〉への言葉のすりかえをして、〈精神(腺という精神)〉やその働きかけになることを、また彼のいう〈心身〉を合一させることを成り立たしめることによるだけでなく、この「日常的用法」もすでに触れた通り⁽⁴³⁾、「科学哲学」的方法のもとに導出たらしめたことによるといえるわけである。

「日常的用法」は何よりも「(自然)科学」的でなければならなかったはずである。だから対象たる身体をば、デカルトという〈わたし〉なる主観においてではなしに、客観に基づいて究明することが課せられていた。しかるに彼が、〈les idées qui ont été autrefois sur cette glande (腺上に以前あった観念)〉⁽⁴⁴⁾ とか、〈(ayant supposé que) Dieu créât une âme raisonnable, et qu'il la joignît à ce corps en certaine façon que je décrivais (神が理性的精神を創り、神はわたしが述べたある方法で理性的精神をこの身体に結合した(ことを仮定したうえで)) (括弧内や傍線部分は筆者)〉⁽⁴⁵⁾ とか、また前記に従うと、〈神〉は〈思惟する原理〉の〈理性的精神〉の主要な座を脳の中樞部位に与える)とか語って、〈腺〉の産出物を〈観念〉のせいに、あるいは〈理性的精神〉を〈神〉のせいにするのは、彼という〈わたし〉なる主観をよりどころとしてのこととみるほかない。すると彼が取り上げる「日常的用法」は客観に、つまり「(自然)科学」に終始しない、「科学哲学」になり得るといわねばならなくなる。

デカルトが前段註(44)で〈腺上に以前あった観念〉と、また註(45)で〈わたしが述べたある方法〉と記すにあつて、まず前者の〈腺〉に〈観念〉をみるのは彼の主観である(〈腺〉はこのとき身体ではなく、精神になるからして、この

引用においても、筆者のいう「腺という精神」のあることが証明される)。そして後者の〈ある方法〉を、彼は〈脳の中枢部位⁽⁴⁶⁾〉の〈腺〉への〈機械運動〉から〈理性的精神〉のたとえば〈imager〉の〈腺〉のたとえば身体の想像への働きかけと捉え直して打ち立てたり、その働きかけで、〈腺(上)〉に〈観念〉が、たとえば〈imagination〉なる〈観念(知覚または痕跡)〉が生み出されたりするとみるのも彼の主観である。だから「日常的用法」は「(自然)科学」に、主観と切り離されない「哲学」を導入させたという意味でのみ用いられる「科学哲学」の成果でしかないことになる(「日常的用法」はいわば唯物論に観念論を導入したがゆえに、「矛盾」を脱し切れないとみる。この点は、次回以降に触れる予定にしている)。かつ〈神〉のことも「科学哲学」としての対象にするならば、そこに持ち込め得るはずである。自らの主観によって、身体の精神化を、たとえば〈脳の中枢部位〉の〈理性的精神〉化を〈神〉のなせるわざと確信させ認めたのは、ほかの誰でもないデカルトなのである。ここでは彼がなぜ〈神〉を登場させたかや「〈神〉のなせるわざ」とみなすその真偽より、あるいは〈神〉は存在するかどうかを問うより、たんにかかる確信と容認の言(見解)が、とどのつまり〈神〉のこゝとを取り込まずにおれない彼の主観が優先されたといっておかねばならないのである。

しかも「人間論」(1630年-1633年)で註(34)とした引用〈神はこの機械に理性的精神を結びつけるときには〉に比して、【方法序説】(1637年)で註(45)の傍線部分とした引用〈神はわたしが述べたある方法で理性的精神をこの身体に結合した〉というなかに〈ある方法〉と記されるおかげで、デカルトは、筆者のこれまでに繰り返し主張してきたその〈方法〉が、つまり〈理性的精神〉の能力〈imager〉を例にしていえば、〈imager〉が〈この身体(腺)〉に働きかけて〈腺(精神)〉としての〈imagination〉を生み出すという〈方法〉があること⁽⁴⁷⁾を、さらに彼の真に意図させよう〈心身合一〉が(これが筆者にあるといわせるかはともかくも)、筆者の先きに強調した〈心身合一〉にあることを、つまり〈imagination〉の産出において、身体たる〈腺〉が〈精神(âme)〉になるとする〈心身合一〉のこゝとを明らかにさせてくれるのである。してみても、彼が上記両方の引用文に書くように、少なくとも〈理性的精神〉のこゝとを構想し提示せずば、〈imagination〉によるこの〈心身合一〉の成立すら問題にならなかったといえるはずである。換言すると彼は、〈動物精気(血液)〉が達し、〈imagination〉

の誕生に至る前まで〈身〉でしかない〈腺〉や、註(34)でいう〈脳の中樞部位〉のいずれの〈身〉よりも、まるで『創世記』を模すかのように、人間のなかでは註(45)の〈神が理性的精神を創り〉、〈神〉はこの〈理性的精神〉を註(34)の〈脳の中樞部位に与える〉序列をもって、〈理性的精神〉の〈心〉への位置づけを真先きに成し得るをよしとすることなしに、〈腺〉における〈心身合一〉を可能にさせ得なかったということである（以上によっても、彼の主観で〈理性的精神〉が「日常的用法」においてさえ、身体より優位に位置づけられることが証明されたといえる⁽⁴⁸⁾し、〈腺〉における〈心身合一〉については、本文の〈imagination〉の例ですでに触れたので繰返しはしないが、果たしてこの〈心身合一〉があると断じられるか、筆者なりに明かすことだけが次回以降に残された課題であると付記しておく）。

加えて〈理性的精神〉を「腺という精神」より優位たらしめていると捉えられるのは、〈理性的精神〉に、本文引用文⑰⑱と㉔を何度となく持ち出しては語った通りの諸能力が、別言するとデカルトが「(自然)科学」のもとでの表現であろう〈機械運動〉を働きかける意のさまざまな〈能動〉の語に置き換えていう諸能力が、またなかでも〈腺〉における〈心身合一〉を可能にさせるうえでは、〈sentir (感じる)〉と〈imaginer (想像する)〉があったためなのである。〈心身合一〉によって上記のことを再度明かすと、こうである。つまり〈理性的精神〉の諸能力たる〈感じる〉や〈想像する〉がそれぞれ〈腺〉に到達した身体感覚や想像に働きかけるのを優先させることなしに、身体感覚や想像は精神の〈sentiment〉や〈imagination〉として展開されようがない。だから身体感覚や想像が活かされるには、何より〈理性的精神〉の〈感じる〉や〈想像する〉が、しかも各身体感覚や想像に対応すべきこの各分類と名称⁽⁴⁹⁾がなければならない、しかしその〈感じる〉や〈想像する〉方に〈能動〉の役割を担わせずに、これらのおのおのと各身体感覚や想像の関係が見出せないということである。そうでないと、その〈感じる〉や〈想像する〉はおのおの、〈脳〉の入口以降で、身体から〈神経を介して〉「求心的」に伝わってきた身体感覚や想像が〈動物精気(血液)〉と各〈混ざる〉その〈動物精気(血液)〉にも、かつこの〈動物精気(血液)〉が達しよう各〈腺(の座)〉や〈孔〉にも、それどころか〈脳(身体)〉のいずれとも結びつくことなく、それがゆえに〈心身合一〉をかたちづくる因子にさえなれなくなるであろうといえるのである。

ところがデカルトが多くの作品中でしばしば、〈心身合一〉が成ると強調することから、筆者にはなるほど、〈理性的精神〉の諸能力としても捉えられるといい得る。たとえば引用文⑰⑱と㉔の〈感じる〉や〈想像する〉という前段までに記した用法は、この〈感じる〉や〈想像する〉のそれぞれをして〈心身〉を結合させんがために、身体としてある〈腺〉(この〈心身合一〉のことにより、〈腺〉は何よりもまず身体としてなければならぬことが明かされた)のみか、〈孔〉とも関係たらしめる必要があったとみえても、彼にあって当時の「(自然)科学」では解明されず行き詰まった問題を、あたかも〈神〉と、あるいは「je serais Dieu (わたしは神であったであろう)」⁽⁶⁰⁾と、あるいは上記に〈理性的精神〉と名付けられているとともに、〈l'âme raisonnable doit expressément être créée (これ(理性的精神)は意図して創られるにちがいない)〉⁽⁶¹⁾と記すごとき決着を試みさせる彼の主観(「哲学」)でもって仕上げられたとしかいいようがなくなってくる。

しかしデカルトの主観で、ことのはじめから〈神〉によって、〈理性的精神〉は〈創〉られたり、〈脳の中枢部位〉に据え置かれたりした、換言すると〈脳の中枢部位〉が当時の「(自然)科学」的知識の一であろうが、これを〈理性的精神〉とし、この〈理性的精神〉の名称とその諸能力の活用の因由を〈神〉に求めたのは彼であるということは、およそ〈理性的精神〉がいわゆる〈真理の探求〉以外の精神としてある、筆者の名付けよう「日常的用法」を成り立たせるための、しかもその「日常的用法」にあっては、これまで語った〈sentir(感じる)〉や〈imaginer(想像する)〉が〈脳の中枢部位(理性的精神)〉から〈心身合一〉の形成にむけ、〈神経を介して〉、たとえば〈腺〉に働きかけるような各能力の役割をさすだけではなく、〈理性的精神〉が〈脳の中枢部位〉をしてあくまで〈理性的〉であらしめるための不可欠な諸能力を有する役割をも担うところにこそあると予測しておかねばならないのである。この役割にある諸能力とは、〈感じる〉や〈想像する〉が各産出した能力にかかわって働きかける(後述)し、もとより主観をかたちづくらせるに貢献しよう〈思惟〉の〈思惟〉たる能力、すなわち引用文⑰⑱や㉔の例でいえば、〈concevoirまたは entendre(理解する)〉や〈vouloir(意志する)〉などの〈能動〉の諸能力になるであろう。

そこで筆者にとって、「〈腺〉という精神」として産出される能力〈sentiment〉や〈imagination〉)に比べて、〈理性的〉であることを代表させよう、〈concevoir

または *entendre* や *vouloir* のおのおのによって産出される能力 (*compréhension* または *entendement* (理解) や *volonté* (意志) などが、かつ *vouloir* や *juger* (判断する))⁽⁵²⁾ のそれぞれによって産出される場合の *passion* (「情念的受動」またはいわゆる *情念*) が *理性的精神* (脳の中枢部位) (内) において見出されてくると指摘できるが、それでも *理性的精神* に上記の諸能力が誕生するのはどうしてか、つまり上記の諸能力はどのような働きかけをして生まれたと云うてよいのかが問われてくる。

上記の諸能力がなぜ *理性的精神* (脳の中枢部位) にて生み出されるとみることが可能かといえ、筆者がすでに触れておいた通り、*concevoir* または *entendre* や *vouloir* などが「日常的用法」における *作為観念*⁽⁵³⁾ を形成するからである。ただしここでは、いわゆる *情念* は *作為観念* ではない (*理性的精神* で誕生するとされるいわゆる *情念* は *受動*) の一であるがゆえに、*理性的精神* での *外来観念* であるといっておく。この *外来観念* はまた、「*腺* という精神」でも誕生したと断じ得るから、問わずに済ませられるし、さらに *作為観念* に関係する諸能力がいかなる働きかけをしてその *作為観念* をもたらすかの経緯を語ることも必要となろうが、しかしたとえば *concevoir* または *entendre* や *vouloir* に代表される諸能力の働きかけを可能にする条件が何かを提示することだけでよしとされなければならぬであろう (詳細は次回以降に記す予定である)。

その条件の要は、デカルトが *le mouvement du sang dans le corps n'est qu'une circulation perpétuelle* (身体での血液運動は永続的な循環でしかない)⁽⁵⁴⁾ と述べる *循環* の読みにある。筆者はその際、註(54)の *血液* の、つまり既出引用文⑫⁽⁵⁵⁾ の *動物精気* の *循環* には、身体から *心臓* を通り *脳* へとのほるまでの、かつこの *脳* 中の流れにおいては最後の部位になるとみる *腺* までの「*求心的*」な流れと、註(55)での *動物精気* が *腺* から出る」と語られることで、その *腺* から身体へと移る「*遠心的*」な流れとがあり、*血液* は「*求心的*」から「*遠心的*」へとたえず繰返されて流れると前記したことを想起したい。ここでわけても問われるのは *動物精気* の「*遠心的*」な流れである。なんと云え、前段に取り上げた *vouloir* などの諸能力は、*腺* から出る *動物精気* と *脳の中枢部位* にてかかわらねばならぬと指摘できるからである。次なる引用文を注視しよう。これは既出引用文㊶⑤(註(37)参照)

の〈動物精氣〉の「求心的」な流れに比して、(à mesure que ces esprits entrent ainsi dans les concavités du cerveau, ils passent de là dans les pores de sa substance, et de ces pores dans les nerfs (この動物精氣(血液)は脳の凹みに入るに従って、そこから脳本体の孔を通り、その孔から神経に入る)(括弧内は筆者))⁶⁶⁾と記されるがゆえに、〈腺(H)から出〉ての、〈動物精氣〉の「遠心的」な流れになると捉えられる。註(56)を〈動物精氣〉の「遠心的」な流れと指摘できるにせよ、しかし〈動物精氣〉の主成分はもはや〈血液〉としてあるより、能力であるとみなしておくことが肝要なのである。要するに註(56)のかかる流れは主に能力の〈動物精氣〉の流れに、しかもこの能力が〈腺から出〉て、「遠心的」に再度〈脳の凹み〉と〈脳本体の孔を通り、その孔から神経に入〉ったのち、既出引用文が語るのをさらに記すには〈脳から神経によって筋肉にうつり、身体のすべての部分に運動を与える)⁶⁷⁾ような流れにしかならないということである。そしてここに、つまり「能力が〈腺から出〉て、「遠心的」に再度〈脳の凹み〉と〈脳本体の孔を通り〉、〈神経に入る〉」ことにおいて、〈脳〉内における〈動物精氣(能力)〉が〈循環〉するというその読みの一が仮定される。〈腺から出る〉この能力、したがってもともと〈腺〉で産出されたこの能力も、まことに〈思惟する原理〉にかかわざるを得ないであろう。デカルトが〈腺〉に〈動物精氣〉が流れると指摘するにしても、この〈動物精氣〉にはすでに能力が加わっているからして、さらに〈理性的精神〉の〈sentir〉や〈imaginer〉がそれぞれ、〈動物精氣〉の能力(身体のsensやimagination)に働きかけ得たからして、〈腺〉を精神と、筆者のいう「〈腺〉という精神」とみなすし、身体(の各能力)より、あるいは身体の各能力を精神の各能力として誕生させる以上、精神(の諸能力)の方が優位であると断じられるのである。ただ〈腺〉で産出された能力がその〈腺から出〉ても、〈神経に入〉らない場合があることを想定できよう。その際この能力は〈腺から出る〉までに、つまり〈腺(精神)〉または「〈腺〉という精神」で発揮されるにとどまってしまう能力となるにちがいない。〈腺〉で産出されよう能力とは「〈腺〉という精神」としての、いわずと知れた〈感覚 sentiment)〉や〈想像 imagination)〉たる各能力である。しかし〈腺〉を〈出る〉前までは、各能力は〈血液〉と〈混ざ〉った〈動物精氣〉としてあるか、つまり〈腺〉でのみ発揮される〈感覚)〉や〈想像)〉はいかなる〈動物精氣〉であるのか、そのうえ〈腺〉を〈出〉てからは、各能力以外の〈動物精氣〉

はいったいいかに流れるかを次号で検討する必要があるだろう。おそらく〈血液〉の方はおよそ註(56)に記される〈脳の凹み〉と〈脳本体の孔を通〉ることになる。ときに〈神経に入る〉ことがある。〈腺から出〉てのち、〈神経に入〉らない〈血液〉は「遠心的」に〈血管〉(註(57)を参照してはその〈神経〉以外での〈筋肉〉の、さらに〈身体のすべての部分〉の〈血管〉)を通して、再び(la plupart des parties du sang) retournent dans le cœur ((血液の粒子の)大部分は心臓に戻る(括弧内は筆者))⁽⁵⁸⁾のである。これこそ〈動物精気(血液)〉が〈循環〉するというその読みのもう一つに該当する。〈血液〉はまた、〈筋肉〉を含めた〈身体のすべての部分〉に対してはむしろのこと、他方能力が介在するかぎり、精神と捉えられる〈腺〉、だから〈血液〉がその能力と〈混ざ〉ってある〈腺〉にとっても、〈わたしたちが栄養を取り、成長する原理〉になると語られるのである。

ここで以下のことが前段に付加されよう。〈脳〉に入った「求心的」な〈動物精気〉には、身体としての〈孔〉(この〈孔(trou)〉は註(56)に記される〈孔(pore)〉とは同じ訳語であっても、役割が相違する)や〈腺〉に達するまで、〈血液〉と身体の諸能力(感覚sensや想像imagination)とが〈混ざ〉ったままであった。デカルトは〈動物精気〉のこの成分のうち、とくに身体の諸能力に関していうに、たとえば身体の想像が〈脳の中枢部位(理性的精神)〉の〈想像するimaginer〉能力と〈孔〉や〈腺〉でかかわって、〈孔〉では「〈受動〉としての想像」が、〈腺〉では「たんなる想像」などが産出されることを主張するようにみえると同時に、この「〈受動〉としての想像」や「たんなる想像」がそれぞれ、〈孔〉や〈腺〉を〈出る〉前まで〈血液〉と〈混ざ〉っている〈動物精気〉にみなされるに反して、「〈受動〉としての想像」が〈孔〉を〈出〉てからどうなるのかの分析は次回以降に譲るとしても、「たんなる想像」が〈腺〉を〈出〉たのち、〈脳の凹み〉と〈脳本体の孔を通り〉、〈神経に入る〉方向に導かれるにあっては、〈動物精気〉の中味は「たんなる想像」という能力のみに満たされていないかならぬことを暗に理解させようとするのである。なんとすれば、彼が〈神経〉を伝わるは〈血液〉でなく、もとより能力であるとみるからである。そこで〈神経に入る〉と書いた神経とは何かとなる。この神経は、筆者がこれまで質してきた〈脳の中枢部位〉の〈神経〉でしかないと察知される。要は〈神経に入る〉という神経と〈(理性的)精神(脳の中枢部位)〉が神経を介して

受け入れる」と記される神経は同じでなければならぬ、とどのつまり〈神経に入る〉神経とは〈神経を介して〉の神経でなければならないということである。だからその〈神経に入る〉とは〈sentiment〉や〈imagination〉がおのおの〈脳の中枢部位〉に入ることさえ含意させる。そのように理解しておかないと、〈理性的精神（脳の中枢部位）〉にかかわる神経を「遠心的」な〈神経〉と断じたことが宙に浮くばかりか、〈理性的精神〉の〈sentir〉や〈imaginer〉以外の諸能力がその〈sentiment〉や〈imagination〉のそれぞれに働きかけることができないし、〈脳の中枢部位〉ではじめて産出される〈わたしたちの（理性的）精神〉に関係づけられる（既出引用文⑨参照）諸能力が、註(57)にみられる通り、〈筋肉〉を含んだ〈身体のすべての部分〉に「遠心的」な〈神経によって〉伝わるのでできなくなるのである。

前段のことを具体的な語を用い、繰返してでもいうと、次のようになる。〈血液〉と能力の〈混ざる×動物精気〉が「求心的」に〈脳の中枢部位〉から〈孔〉や〈腺〉に至るまで流れ通るは〈神経〉ではなく、〈動脈（血管）〉⁽⁵⁹⁾であった（ただしデカルトにあって、身体の〈感覚 sens〉や〈想像 imagination〉なる各能力は〈心臓から脳（の入口）へのぼる〉⁽⁶⁰⁾まで、〈神経〉に依拠し、「求心的」に伝わるものが想起される必要があるし、これと本文上記以外のことでは、〈血液〉と各能力の〈混ざる×動物精気〉はわけても、各能力を〈腺（の表面）〉で身体のでなしに、精神としての〈sentiment〉や〈imagination〉の〈動物精気〉なる能力としたのち、〈腺〉に接続しよう血管（彼はこれを〈le tuyau（管）〉（『人間論』中既出引用文⑤の前段中の語）という）を流れてから〈脳の凹み〉と〈脳本体の孔を通り、その孔から神経に入る〉直前まで、〈血液〉と新たな各能力の〈混ざり〉のままの「遠心的」な〈動物精気〉の流れとなることが喚起されねばなるまい）。だがなかでも〈腺〉にて産出し得る〈sentiment〉や〈imagination〉たる各能力の〈動物精気〉が〈腺〉から出て、〈管〉やしかも〈脳本体の孔から〉「遠心的」な〈神経に入〉らないと、かかる〈動物精気〉は〈脳の中枢部位〉に付属し、そこから出る、これも同じ「遠心的」な〈神経を介して〉の〈神経〉に関与せずにいると同時に、その〈脳の中枢部位（理性的精神）〉の〈理解する concevoir〉や〈意志する vouloir〉（本稿引用文⑦と⑩参照）という諸能力のおおのが、〈脳の中枢部位〉の〈神経〉で〈sentiment〉や〈imagination〉に働きかけないと、それこそ〈わたしたちの精神（理性的精神）〉

に（新たに）関係づけられる」と彼が強調しよう、いわゆる〈passion（情念）〉、〈compréhension（理解）〉や〈volonté（意志）〉が〈理性的精神〉の諸能力として誕生し得ないし、〈神経に入り〉、〈神経を介して〉という「遠心的」な〈神経〉に送り出されて伝わるができないのみか、たとえば〈意志〉が〈脳から（出て、脳の外のもの）さらなる「遠心的」な〉神経によって筋肉にうつり、身体のすべての部分に（意志たる）運動を与える）こともできなくなるわけである。そうだとすると、この「遠心的」な〈神経〉をもって〈身体のすべての部分〉に伝わる〈意志〉は伝達後、もとより〈血液〉のように〈循環〉するのではない。つまり〈意志〉は時間（的経過）を抜きに言えば、一回かぎりのその〈運動を与える〉だけであると察知すべきである。〈意志〉はその都度身体を動かすのでないと、何度も身体をかけめぐりに終始し、本稿引用文⑰と⑱の、〈理性的精神〉にも適用されよう他の諸能力の使用が一向に可能とならないばかりか、その各能力が身体に伝わることはなくなってしまう。だがそんなことはない。彼は〈理性的精神〉のあらゆる能力の〈能動〉的使用を認めずにおれないからして、たとえば周知の『Passions（情念）論』を書き上げ得たし、『情念論』に語られる諸能力は筆者にとって、これと上記⑰と⑱の作品以外のいかなる作品での記載も見当たらないといえたがゆえに、もはやこの⑰と⑱の諸能力に求められるほかないと指摘することができる。だから筆者は先きに、⑰と⑱が⑲も含め、たんにいわゆる〈真理の探求〉の諸能力にだけでなく、「日常的用法」の諸能力にさえ通用させて読まれなければならないと断じ得たのである。〔省察〕に述べられる諸能力なのだから、それらは確かにいわゆる〈真理の探求〉の用法にかかわるしかないとみえるが、それでも彼はこの諸能力にもう一つの読みを暗示させていたというわけである（⑰と⑱は確実に各用法の諸能力となる。⑲の諸能力中に〈sentir〉が記されるかぎりは、いわゆる〈真理の探求〉以外に、「日常的用法」もあることを示す。ただし〈sentir〉は前者の用法では、この名が刻まれるのみで、実際に「働きかける」ことはないのに対し、後者の用法では、実際に「働きかける」能力となって区別されよう。このことは⑰と⑱のその〈imaginer〉を含めたいずれの用法にあっても、同じようにいえることである）。そこで「日常的用法」の諸能力があることからは、この諸能力を働かせる〈âme〉が、しかも「〈腺〉という精神〈âme〉」だけでなく、〈理性的精神（âme raisonnable）〉があると語られることになる。これはまた、いわゆる〈真理の探

求)の諸能力があることで、その諸能力を活かす(esprit)があるとみられるのと同様である。

とまれ〈腺〉についてさらに確認しておくべきは、一に、〈脳〉に入ること、〈血液〉と身体の諸能力(感覚や想像)の〈混ざ〉らずにおれない〈動物精気〉が〈脳〉の〈動脈〉を通過して、ときに〈孔(trou)〉、ときに〈腺〉に流れるにあつて、〈腺〉は〈孔〉に次ぐ順位の部位であるから、〈腺〉には〈孔〉とは相違する〈動物精気〉が関与せざるを得ないということにある。この〈動物精気〉は〈動脈(血管)〉を流れる以上、当然〈血液〉となる。ただしデカルトでは、身体の感覚や想像たる各能力の〈混ざ〉った〈血液〉と、またはその〈血液の粒子〉と表現される。かつ〈孔〉にとどまる各能力たる〈血液の粒子〉はもとより、〈腺〉に流れることはなかった、つまり身体の感覚の場合、この〈粒子〉は〈大きい〉し、身体の想像の場合、この〈粒子〉は〈多様に動かされ〉たために、〈孔〉に流れるにかぎられることになる(下記註(61)欄参照)。このことは、筆者がすでに、〈動物精気(血液の粒子)〉を身体の感覚や想像に見立てながら、この各能力がいかにあるかの分析によって、〈血液の粒子〉が〈孔〉や〈腺〉に向かうとみた⁽⁶¹⁾ことで諒解できよう。また一に、身体の感覚や想像をして〈孔〉や〈腺〉で〈感覚 sentiment〉や〈想像 imagination〉なる諸能力たらしめ、依然〈血液〉自体と〈混ざ〉ったままの〈動物精気〉は、まさに当の〈孔〉や〈腺〉のこの各諸能力の誕生において、〈脳の中樞部位(理性的精神)〉の〈感じる sentir〉や〈想像する imaginer〉なる諸能力との各関係を抜きに、もはや身体のではない、精神としての諸能力を含めたとみなしてよい〈動物精気〉を成り立たせ得なかつたということにある。これも前記していたことであつて(前段註(60)以降参照)、繰返しはしないし、同時に〈孔〉での諸能力(〈孔〉にとどまる身体の感覚や想像)のおおのにおの、〈理性的精神〉の〈感じる〉や〈想像する〉がそれぞれ真にかかわっているとみてよいのか(筆者は既出引用文②やその12頁において、〈孔〉で「受動的 sentiment (〈受動〉としての感覚)」や、これと同様に「〈受動〉としての想像」が産出されたとしても、これらは身体(「〈孔〉という身体」⁽⁶²⁾)の諸能力になると推測していた)、つまり〈孔〉に生み出される諸能力が果たして、〈脳の中樞部位〉やこの〈神経〉と関係したこととみてとれるか、またさらにそれらの諸能力が〈孔〉から〈出〉て以降のことはどうなるのか、つまりこの諸能力も〈神経に入る〉のか、〈神経

に入) っては〈脳の中枢部位 (理性的精神)〉の〈concevoir〉や〈vouloir〉などの〈能動〉的働きかけを受けるかは、次回以降の課題にするほかないと前記した通り、ここでも再度断わっておく。だから以下では、最後となる一に、〈腺〉における諸能力のことが掲げられ、これらがどうなるかがまとめられねばならなくなる。

まず、〈腺〉に流れた身体感覚や想像の各能力に対し、〈脳の中枢部位 (理性的精神)〉の〈感じる〉や〈想像する〉各能力が働きかける、働きかけないときのあることを予想するならば、前者では何度も指摘したように、身体感覚 (sens) や想像 (imagination) の各能力ではもはやない、精神の感覚や想像の各能力が産出されるであろう、換言すると〈腺〉で誕生する感覚 (sentiment) や想像 (imagination) は「〈腺〉という精神」の各能力となるであろうが、後者では身体感覚や想像の各能力が〈腺〉で消滅してしまうかは、またこの各能力に〈血液〉の〈混ざ〉った〈動物精気〉がそのままに、いやはては〈血液〉か各能力のどちらかだけが〈身体のすべての部分〉に流れるか伝わるかは、デカルトによって明かされるようには読み取れないであろうといえる。

次に、〈腺〉で産出された、精神としての〈感覚〉や〈想像〉の各能力が〈腺から出〉て〈神経に入る〉場合、また〈神経に入〉らない場合のあることを想定するならば、前者ではこれもみていた通り、〈動物精気〉中の各能力だけが〈神経に入る〉ことになるが、後者ではその各能力たる〈感覚 sentiment〉や〈想像 imagination〉が〈腺Hの表面に描かれる表象〉(既出引用文⑩参照)になることをもって、各能力が筆者のいう「〈腺〉という精神」で、いわゆる「反射」を惹起させる当の各能力たり得るかは、それとも各能力が〈血液〉と依然〈混ざ〉ったままで「遠心的」に〈血管〉を流れ、〈身体のすべての部分〉に通じようほどの〈動物精気〉にとどまってしまうかは、彼によって明かされるようには読み取れないであろうといえる。こうした指摘のなかでも、筆者にあっては、〈sentiment〉や〈imagination〉が新たに誕生した際に、〈腺〉は〈âme (精神)〉とみなされるし、この各能力はどちらも〈âme〉としての能力に数えられねばならないことは確かなのである。それなしに、たとえば彼の主張する〈心身合一〉に対して、整合をみるのが不可能となるのである。

そして、〈感覚〉や〈想像〉がそれぞれ、〈神経に入〉ったとするにしろ、今度はまだ、その〈神経〉を従える部位の〈脳の中枢部位 (理性的精神)〉の能力

が、別言するとこの〈sentir〉や〈imaginer〉以外の、〈concevoir〉や〈vouloir〉などの各能力が、例の〈感覚〉や〈想像〉のおのおのに、働きかける場合と働きかけない場合のあることを想定しておくならば、前者ではこれも疾うに触れたごとく、〈理性的精神〉において、たとえばいわゆる〈passion (情念)〉が生み出され、「遠心的」な〈神経を介して×身体すべての部分〉に伝えられるであろうが、しかし後者ではその〈感覚〉や〈想像〉が各〈記憶〉としてそのまま残るか、消滅してしまうか、これら以外かは、彼によって明かされているようには読み取れないであろうといえる。

以上が語られたうえでは、その解答をデカルトの諸作品から得られぬことのあるほか、かえって既出引用文の内容がよくみえてくることもある。たとえば既出引用文 $\textcircled{M}2$ が、その〈sentir〉と〈ressentir〉の用法がそうなのである。このさらなる分析によって、筆者の主張の一に間違いがないことが証明されよう。彼は $\textcircled{M}2$ において、〈理性的精神〉の〈感じる〉が再び働きかけることで、要は「時間 (的経過)」をみて (時をにおいて) 働きかけることで、 $\textcircled{M}2$ に従えば〈douleur〉という能力となって、それが〈腺〉か〈脳の中樞部位 (理性的精神)〉かにもたらされるという。だがこの能力がいずれの部位に見出されるかの答えさえ彼は提示せぬとみるから、これも定かにできない。しかし〈douleur〉の産出に当たって、その〈感じる〉ではなく、〈意志する vouloir〉が働きかけ得るのであれば、〈douleur〉は〈理性的精神〉で生み出されるいわゆる〈情念〉になるといってよいであろう。〈douleur〉が〈情念〉とならないかぎりには、筆者にとって、これは〈腺〉で産出した「能動的 sentiment」の一たる能力であると捉えるしかなくなろうが、それでもそのどちらかであるのを $\textcircled{M}2$ のみに求めることは実際不可能となろう。そうであるにせよ、証明の対象は上記のことにあるのではない。それは、〈感じる〉という訳語に相当しよう語が $\textcircled{M}2$ にあって、〈sentir〉だけでなしに、身体の〈感覚する〉に用いたかの語〈ressentir〉にすら当てはめられ使用されるところに見出されてくる。 $\textcircled{M}2$ では先きに〈sentir〉が記されたあと、「接続法現在」の動詞活用である〈je ressente de la douleur〉が続くからして、この〈ressentir〉は〈sentir〉より「時をにおいて」働きかけることを示唆させずにおかない。これが認められるとなると、「時間 (的経過)」のもとに使われる〈ressentir〉の一例のあることが証明されるとともに、当の〈ressentir〉には、身体において〈感覚する〉や、〈理性的精神〉において〈再

び) 感じる) とみてよい二つの「能動」的用法のあることが確実になるであろう。だがなぜ〈ressentir〉が一方で〈理性的精神〉の「能動」的能力となるのか。それは後述でも明らかにするが、㉓㉔にあつては〈理性的精神〉を〈je (わたし)〉として捉えおかねばならないからである。それに今問う「日常的用法」の〈理性的精神〉は、この〈sentir〉や〈ressentir〉の各働きかけをして身体の〈腺〉を「〈腺〉という精神」たらしめずには、あるいは〈理性的精神〉自身をその各能力の發揮にて、身体としての〈脳の中樞部位〉ではもはやなく、確たる〈理性的精神〉に位置づけたらしめずには、彼のいう〈心身合一〉が成り立つ見通しさえつかかなかつたといえるからである。

しかし以上のような証明を求むるうち、ここで再確認せざるを得ないのは、〈ressentir〉がその一語で、身体と精神としての各能力に使い分けられているということにある。そこには何が意味されるのか。これは、〈ressentir〉が精神の能力に用いられる際は「時間(的経過)」を前提にするといえども、この単語にさらに身体的能力を含意させるように、複数の内容を盛り込ませていることを語るほかない。つまり精神の能力とみた〈ressentir〉は〈理性的精神(脳の中樞部位)〉がなす働きかけであるのに比べて、身体的能力としての〈ressentir〉は感覚器官自体と内臓自体のそれぞれがなす働きかけであるというわけである。さらにデカルトが諸作品に使用するこれと同様な単語を上記〈ressentir〉以外に見出すことはたやすい。あの〈imaginer〉や〈sentir〉もその例であつたのである。各単語は、およそいわゆる〈真理の探求〉において記されるにすぎない能力としてあるだけでなく、「日常的用法」における能力として用いられねばならないと指摘しておいたことが、〈ressentir〉の場合を踏まえることから証明されるわけである。だがなお各単語はいわゆる〈真理の探求〉の能力だと主張する人がいるならば、筆者は、それならどうして「日常的用法」を語るしかない既出引用文㉕と㉔が彼によって書かれたのか疑問になると答えずにおれないであろう。しかし筆者の立場は明確である。すなわち各単語は二つの用法にそれぞれ適用する能力となっていなければならないということである。

また筆者が「日常的用法」の解明に当たってこころがけたことは、たとえば〈理性的精神〉の〈感じる〉が〈腺〉に〈神経を介して〉働きかける場合の、あるいは〈理性的精神(脳の中樞部位)〉自身に〈神経を介して〉働きかける場合のおのおのにおいて、各部位での、とりわけ〈理性的精神〉の〈ressentir〉の使用

にみられるところでの「時間（的経過）」を条件にした分析の試みでなしに、かつ各部位に産出されたその各能力の分析の試みでなしに、筆者は〈感じる〉という例でいうと、これがたんに開始からその終わりに至るまでの一回の〈運動〉にあって、〈腺（âme）〉や〈脳の中枢部位（âme raisonnable）〉のそれぞれで、いかなる能力に働きかけ、いかなる能力を誕生させ得るかを分析するだけであつたことをここに再度断わっておかざるを得ないのである。デカルトには、「時間（的経過）」を取り入れた例が〈ressentir〉の場合しか見当たらず、これ以外の〈能動〉的能力に「時間（的経過）」を導入し問うことがほとんどないと捉えられるにせよ、もし〈ressentir〉以外にあると断じられる際は、その何らかの〈能動〉的能力は上記してきた問題を、換言するとかかる能力が働きかける、働きかけない、つまり〈神経に入る〉、〈神経に入〉らないという各場合の問題を、彼のこの明確な答えを期待できないとはいえ、〈ressentir〉と同様に生じさせずにおかないであらう。

それはともかくも、〈理性的精神（脳の中枢部位）〉の一能力である〈意志する vouloir〉が一回かぎりの〈運動〉として、この部位の〈神経を介して〉働きかける例、すなわち上記と同じ部位の〈神経に入〉ってくる、〈腺〉にすでに誕生した〈感覚 sentiment〉や〈想像 imagination〉のいずれかに働きかけて、〈脳の中枢部位（理性的精神）〉で〈意志 volonté〉を産出する例でさらに確認できることは、この〈volonté〉なる能力こそまさに〈思惟する原理〉中の〈思惟（する）〉に値してもたらされたといえることにある。またこの〈神経〉や〈動脈〉は〈脳の中枢部位〉ばかりか、〈身体すべての部分〉にそれぞれはりめぐらされているとみるは当然であるが、それでもデカルトはその〈神経〉や〈動脈〉のことを、今筆者の質す〈脳の中枢部位〉や〈腺〉に対して使い分けていたとみなされることも確認されねばなるまい。まず〈動物精気〉が〈動脈〉を通過して、〈心臓〉より〈脳〉へ「求心的」に流れるは順に、〈脳の中枢部位〉（次号に詳細に語るが、この部位とは〈脳の凹み〉と〈脳本体〉をさすとみる）と〈腺〉であること（ここでは〈孔〉のことは省く）、次に〈動物精気〉が〈腺から出〉ては、その〈動脈〉をして〈動物精気〉を「遠心的」に流せしめること、そしてこの〈動物精気〉が〈脳の中枢部位〉における〈神経に入る〉直前まで、〈動物精気〉には〈血液〉と「能力」が〈混ざる〉、別言すると〈動物精気〉は〈栄養を取り、成長する原理〉と〈思惟する原理〉で構成されるということに

あった。だから〈動物精気〉が〈脳〉の入口以降、〈脳の中枢部位〉における〈神経に入る〉直前までは、〈動物精気〉はまったく「遠心的」な〈神経〉と関係しなかったことになる。だが〈神経に入〉った〈動物精気〉はすでにして、〈思惟する原理〉にかかわりながら、〈神経に入〉り〈神経を介〉する〈運動〉に従う。たとえば〈腺〉で産出され〈神経に入〉った〈sentiment〉に対する〈vouloir〉などの諸能力の働きかけだけで占められていた（ただし〈思惟する原理〉とは本来、〈理性的精神〉の諸能力が各〈能動〉的に、〈腺〉に対して、ならびに〈脳の中枢部位〉において各働きかけては、その各部位で誕生させよう新たな諸能力までをも含めていなければならぬとみる）。これとは別に、〈腺から出〉ても〈神経に入〉らない〈動物精気〉はおよそ〈栄養を取り、成長する原理〉に満たされた〈血液〉だけとなり、これが「遠心的」に流れるにせよ、「能力」が〈神経〉を「遠心的」に伝わって〈身体のすべての部分〉にとどくとは違い、たとえば〈動脈（血管）〉を通して〈身体のすべての部分〉に達し循環すると見立ておいたはずである。だから先きに記した〈volonté〉をはじめ、〈compréhension〉も〈栄養を取り、成長する原理〉によって生み出されるのでなしに、〈思惟する原理〉を保有した〈脳の中枢部位（理性的精神）〉で新たに産出される各能力にほかならなくなるといわねばならぬのである。

〔続〕

註

今回の参考文献は以下の通りであり、各註はその文献に付した記号A.-C.に従う。

A. René DESCARTES(ŒUVRES LETTRES)Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.

- ① 〈TRAITÉ DE L'HOMME〉
- ② 〈DISCOURS DE LA MÉTHODE〉
- ③ 〈MÉDITATIONS〉
- ④ 〈OBJECTIONS ET RÉPONSES〉
- ⑤ 〈LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE〉
- ⑥ 〈LES PASSIONS DE L'ÂME〉

B. BORNECQUE & CAUËT 〈Dictionnaire LATIN français〉 Belin.

C. 新潟大学人文学部人文科学研究

- ㊶ 【なぜ感受性なのか】(3), 第94輯, 1997年。
- ㊷ 【デカルトにおける理性と感覚】(2), 第98輯, 1998年。
- ㊸ 同上(4), 第101輯, 1999年。
- ㊹ 同上(5), 第103輯, 2000年。
- ㊺ 【シモーヌ・ヴェーユとデカルト】〔I〕, 第104輯, 2000年。
- ㊻ 同上〔II〕, 第106輯, 2001年。
- ㊼ 同上〔III〕, 第107輯, 2001年。

- (1) C.㊶P.P.1-2 参照。
- (2) A.㊶P.278 (またC.㊶P.1.㊶㊶) 参照。なお㊶㊶中の訳語〈感覚する〉は今回、身体の〈感覚する (ressentir)〉の訳語と区別するために〈感じる〉と訂正する (以下註(3)(4)の〈sentir〉の訳語もこれと同様である)。
- (3) A.㊶P.284 (またC.㊶P.P.1-2 ㊶㊷) 参照。
- (4) A.㊶P.331 (またC.㊶P.2 ㊶㊸) 参照。
- (5) A.㊷ (SECONDE) P.274参照。
- (6) A.㊸ (TROISIÈME) P.284参照。
- (7) A.㊹ (SIXIÈME) P.318参照。
- (8) A.㊺ (CINQUIÈMES RÉPONSES) P.481参照 〈ce principe par lequel nous sommes nourris, nous croissons〉参照。
- (9) A.㊻P.482 〈celui par lequel nous pensons〉参照。
- (10) A.㊼P.482 〈la principale partie de l'âme〉参照。
- (11) A.㊽P.482参照。
- (12) A.㊾P.484参照。
- (13) 次号引用文㊿は〈腺 (H)〉, 本稿註(34)は〈脳の中樞部位〉について語る。
- (14) C.㊿P.73引用文⑩参照。
- (15) この語はたとえば, 本稿註(34)中にある。
- (16) 本稿引用文⑪で問うたことをさす。
- (17) これまでの拙論でも度々 〈esprit〉や 〈âme〉に対して「精神」という訳語を用い, 各〈精神〉のうち, 今回は 〈âme〉を分析整理してみた。
- (18) C.㊿P.49参照。
- (19) B.P.27参照。
- (20) C.㊿P.73引用文⑩参照。

- (21) C.㊦P.P.18-19引用文㊦参照。
- (22) C.㊥P.67引用文㊥㊧参照。
- (23) A.㊦P.574参照。
- (24) A.㊤(ART21) P.706(またC.㊥引用文㊥㊧P.P.67-79。なおこの間に記した〈直接〉や〈間接〉に関しては次号以降にて見直す予定でいる。またC.㊤引用文㊤P.P.83-88)参照。
- (25) C.㊦P.P.36-37参照。
- (26) C.㊦P.44参照。
- (27) C.㊦P.37(「〈受動〉としての想像」はもとより〈孔〉に関係していた」し、〈孔〉で産出された)参照。
- (28) この註のすぐ後に続く文章から推測もされるように、デカルトはたとえば〈想像する〉が働きかけねば、いまだ〈腺〉を〈脳(身体)〉と捉えているかのようである(本稿註(20)参照)。筆者はその註(20)の既出引用文㊤に〈これ(精神)〉がその機能を直接に発揮する小さな腺と、つまり〈想像する〉という精神(の能力)が〈腺〉にすでに達した身体の想像に働きかける〈機能を直接に発揮する〉と記されるとき、〈腺〉は精神になり得よう(確実に精神となるは〈腺〉にとって新たな〈想像〉を生み出すときである)と読む。
- (29) 〈痕跡(impressions)〉の語はC.㊤P.83引用文㊤参照。
- (30) 本稿註(24)参照。『Passions 論』の〈ART21〉全体のうち後半に位置しようこの引用文部分は、〈ART21〉中のそれまでの文脈のうえに成り立っているから、註(24)での〈このような身体の想像は〉(という主語は)すでにして、〈精神が神経を介して受け入れる諸知覚〉の〈諸知覚〉と比較できる、つまりこの〈諸知覚〉と同じ土俵(段階)にある、さらにいうとデカルトにあって、かかる〈身体の想像〉はもはやたんなる身体の想像ではなく、あたかも精神の想像として受け取られるような〈知覚〉でなければならない。この〈身体の想像〉は註(25)に記した通り、「〈受動〉としての想像」なのである。〈諸知覚〉の〈腺(H)〉での産出に対するに、「〈受動〉としての想像」たる〈知覚〉が〈孔〉で生み出されることが比べられたのである。だからまたこの〈身体の想像〉は〈腺〉に達するだけではないことをさすといえよう。しかしながら〈腺〉に達する身体の想像は、〈精神が神経を介して受け入れる諸知覚〉の一つに充当する。するとここからさらに知り得ることは、〈精神が神経を介して...〉と語られる〈精神〉は〈腺〉に置換できないということである。〈腺〉がこの〈精神〉に当てはまると断じると、当然〈腺〉が神経を介して受け入れる(〈受け入れる〉とは筆者

のいう「働きかける」であった) 諸知覚) ということになるが、しかし〈腺〉には〈受け入れる〉とする〈能動) 的働きかけはないどころか、〈腺〉は〈神経を介して) ではなく、何より〈動物精氣) によって (を介して) 〈多くの他の原因 (この場合は〈血液) と同時に 〈身体の想像) も含む) をそのまま取り入れるだけであり、したがって〈腺) 自体による〈諸知覚) を生み出すことはあり得ない (〈腺が神経を介して) とされるにあつて、〈腺) はいったいいかなる部位と〈神経を介) するの。〈腺) は〈能動) 的働きかけを有しないがゆえに、〈腺) の方からいかなる部位に対しても〈神経を介して) 働きかけることができない。働きかけ得るは上記していたように、〈腺) に〈神経を介して) いわば〈意志) してやってくる (これこそ〈能動) 的働きかけである) 〈理性的精神) でなければならない。この〈理性的精神) のことは主に本稿後半部分や次号で分析する)。それに〈腺) に達する〈身体の想像 (複数) 自体が〈諸知覚 (複数) になるとみなされると、〈このような身体の想像) は、およそ〈孔) で産出される身体の能力ではなくると同時に、かかる〈諸知覚ほど) に顕著で明らかな原因を有しない) ことをしては同じ〈腺) の〈諸知覚) 同士で比較することになり (これは比較にならない)、〈顕著で明らかな原因を有しない) 換言すると〈多くの他の原因 (を有する) にももはやかかわりなくなるからして、矛盾たらしめるほかないわけである。

(31) C.㊦P.68引用文㊦参照。

(32) 〈精神) を〈腺) に置換させた例はすでに本文で述べてあるし、これが成立しないことは註(30)に示した通りでもある。

(33) C.㊦P.83引用文㊦ (とくに括弧の箇所) 参照。

(34) C.㊦註(44)P.82とP.92参照。

(35) 本稿註(31)と註(34)参照。

(36) C.㊦註(34)P.80とP.91参照。

(37) C.㊦P.59引用文㊦㊦参照。

(38) C.㊦P.48-51参照。

(39) 三つの〈想像) が〈腺) にみられることは、まずC.㊦P.68-79で筆者の名付けた本文の名称にて取り上げられたこと、そしてC.㊦P.31とP.42とP.48 (「たんなる想像」「悟性を手助けする想像」「情念になる想像) で検討したことによっている。

(40) C.㊦P.42-43参照。

(41) 本稿P.4の新段落〈āmc) 以降の内容と註(15)と註(16)P.6と註(15)での〈理

性的精神)のことは註(34)以降と註(35)(36)P.19参照。

- (42) 「〈理性的精神〉は〈思惟する原理〉を保有する」と断じることが、「なぜ、〈思惟する原理〉が〈精神(腺)〉にでなしに... 〈理性的精神(脳の中樞部位)〉にあるとみることができるか」(本稿P.8新段落における)との問いに対する答えとなる。
- (43) C.㊦註(94)P.46とP.54参照。
- (44) A.㊦P.852参照。
- (45) A.㊦P.157参照。
- (46) C.㊦註(92)P.45 (〈言葉は人間の取り決めによるほか何んの意味もない〉)参照。もともと〈脳の中樞部位〉も〈腺〉という名称も〈人間の取り決め〉であるとデカルトが指摘するにしても、これらは当然当時の「(自然)科学」の客観的事項に従って語られるとみてよいであろう。
- (47) 筆者はデカルトが註(45)中で〈わたしが述べたある方法〉と記したその箇所をこの「方法序説」(A.㊦)でなく、他に見出すと推定するに、上記引用は筆者もすでに引用文として提示したC.㊦P.68引用文㊦とC.㊦P.83引用文㊦, すなわちA.㊦(「人間論」)P.851-852に書かれたことにちがいないと捉えおく。
- (48) C.㊦P.85-86参照。
- (49) 本稿P.21「分類と命名」とはその頁一段落目参照。
- (50) A.㊦P.296参照。
- (51) A.㊦P.166参照(括弧の訳文は原文での〈elle〉に対し明確化をきすためだからして、本文の主語も原語に置換した)。
- (52) C.㊦P.21-22またC.㊦P.77に示しおいた各能力がいわゆる〈情念〉を形成すると明言しているが、いまだ証明はされていない。この証明は次回以降に譲る。
- (53) C.㊦参照(この拙論には〈作為観念〉のこののみか、〈外来観念〉や〈生得観念〉も触れられてある)。
- (54) A.㊦P.811参照。
- (55) C.㊦P.83参照。
- (56) A.㊦P.814参照(この引用文の意味内容と文体はほぼ既出引用文㊦㊦(C.㊦P.60またA.㊦ART10P.700)と同じである。前者の引用が「人間論」(1630年-1633年)、後者の引用が「Passions(情念)論」(1649年)であってみれば、そこに何が見えるか。すでに後者と同内容が前者に見出されていることは、たんに前者の繰返しを後者に書き込むというより、二作品間の日時を考えると、「日常的用法」としての長い考究のあとが伺えるから、その「日常的用法」が少なからずいわ

ゆる〈真理の探求〉のあとに付属し次いでに成ったとは読み得ない、つまり筆者にすると、むしろ「日常的用法」を確立させんとするデカルトの姿勢のなかに、いわゆる〈真理の探求〉が生まれでてきたのではないか、あるいはいわゆる〈真理の探求〉が主目的であったにしても、彼はこれを少なくとも「日常的用法」と同時進行させていたのではないか、とどのつまり彼はいわゆる〈真理の探求〉だけを主張していたのではなく、これと同時に「日常的用法」を探究していたということである。そうでなくては、筆者のいうもう一つの「真理の探求」がみえてこないといっておかねばならない。

なお既出引用文(原文)㊗㉗の語〈cavités〉は〈concavités〉の誤植であると訂正しておく。

なおまたC.㊗P.18引用文㉖に〈動物精気〉が〈心臓から脳へとのぼる〉とあるこの流れこそ、筆者のいう「求心的」な流れであるとみておく。

なおまた筆者はC.㊗P.61で、〈動物精気(血液)〉の脳中の「求心的」な流れを「〈孔〉〈脳の凹み×脳本体〉そして〈腺(H)〉の順に」とあると記しおいたが、この註(56)やC.㊗P.59引用文㊗㉕を再度検討した結果、その流れは〈脳の凹み×脳本体×孔×腺(H)〉の順になるとの確信から、そのように訂正する。註(56)の引用自体は本文の通り、〈動物精気〉の「遠心的」な流れとなる。

(57) C.㊗P.18引用文㉖参照(なお〈筋肉〉に関しては前記註(56)とほぼ意味内容と文体が同じとみた既出引用文㊗㉗(C.㊗P.60)にも記されてあるがゆえに、この〈筋肉〉へもまた〈孔〉を通り〈神経〉を経た能力が伝わるといえる。だから〈腺〉に関係する場合、〈筋肉〉に達し得る何かがあるか問うために、括弧をもうけ「後述」とした次第である)。

(58) A.㉗P.811参照。

(59) C.㊗P.59引用文㊗㉕参照。

(60) C.㊗P.18引用文㉖参照。

(61) 身体の実感の場合は既出引用文㊗㉕(C.㊗P.59)、㉗と㉘(C.㊗P.P.18-19)を、身体の実像の場合は既出引用文㊗㉒、㊗㉔、㊗㉙、㊗㉚と㊗㉛(C.㊗P.P.56-79)を参照。前者と後者の各既出引用文で語られるなかに、身体の実感や実像がそれぞれ〈孔〉や〈腺〉に流れねばならない条件をみることができた。

(62) C.㉗P.37参照。